
Ambivalent Quaker **執筆断念**

大童 小人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Ambivalent Quaker 執筆断念

【Nコード】

N3502F

【作者名】

大童 小人

【あらすじ】

アナントル半島を治める、ドラランチス力高原王国。西の帝国キーツシリクより独立して五十余年。過去に二度の大戦と、無数の小競り合いを繰り返すも、おおむね平和が保たれていた。執筆、断念しました。

第一話 「魔獣の初陣」 前編（前書き）

甘かったり辛かったり。残酷だったり、そうでなかったり。執筆している自分すら先の見えない小説になりそうです。無駄に長いので、目を休ませて読んで下さい。

第一話 「魔獣の初陣」 前編

1

「あらかた逃げ散ったんじゃないか？ ゴブリンどもは」

赤褐色せきかつしよくの頭髪を掻きあげて、ユウヒは溜め息を吐いた。

やや長めの髪だが質は固く、撫でつけられても勢いよく汗を弾き、動物の体毛さながら元に戻っていく。髪質に同じく、気質も剛直きうちくらしい若き兵士は、返り血にまみれても泰然たいぜんとし、息を整えつつ周囲を窺うかがった。

ユウヒは隣に立つ、遠くを眺めている老兵　シナに話しかけたのだが、すぐに返事はこなかった。短いが苛烈かれつな戦闘後ともあって、いつのまにか重傷を負おっていたのだろうか、と視線を向ける。

だが、シナに自失してしまうような怪我けがはなく、むしろ無傷であった。ゴブリンの返り血もなく、刀身にさえ血がついていない。

まさか日和見ひよりみして戦わずにいたのでは、と邪推じゃすいしたユウヒは、先刻こくとは違う言葉を重ねようとして、

「……いんや、戦時下の魔物はしつこいんだぜ、坊主ぼうしゅ」

先んじた老人が、ぽつりと返答した。ついでに、鎧よろいの首下くびもとから取り出した、血まみれの懐紙かいしを開いてみせる。心術しんじゆつも老巧らうこうらしく、ユウヒの邪推にも答えを示していた。

ばつが悪くなったユウヒは苦笑をたたえ、シナの視線を追う。

いましがた追い払ったゴブリンとは違う群れらしい一団が、広大な丘陵たかねの一角に現れていた。くすんだ赤銅色しゃくどういろの小さな身体が丘の上に並んでおり、少年と老人を物色しているのか、やけに高い鼻を振りまわして騒いでいる。

ゴブリンに見下されて良い気分になるわけもなく、

「ちっ。……来るなら、さっさと来いよ！」

怒鳴り、ユウヒは風変わりな長剣を一振りした。やや細身で厚みがあり、鍔は小さく、柄が長い。槍にも似た武器は、所有者に劣らず鮮血に染まっていた。

それだけの出血を強いられたゴブリンたちは、彼らの足元で累累と死体をさらしている。この状況で「来い」と挑発されても、威嚇以外のなにものでもないだろう。

丈の短い草を踏みしだきながらユウヒが丘を駆けのぼっていくと、ゴブリンたちは文字通りに飛びあがって、方々へと散っていった。

猛々しく鼻を鳴らすユウヒに、のんびりと追いついてきたシナが笑いかける。あまり質のよい笑みではない。

「さすが、“トローンの魔獣”だな。……なあ、坊主。しばらく血まみれでいてくれると助かるんだが？」

「冗談じゃない、臭くて鼻がおかしくなりそうだったのに」

いままで頓着していなかったのは、戦闘による気の高ぶりがあったからだろう。それと知り、あえて「血を拭うな」と言うのには、いまの姿が高い威嚇効果をもたらす、とシナは言いたいわけである。もちろん冗談だが。

「冗談ではなく、本気で賞賛しているのは、言葉の前半にあった。併せて、あてこすりの響きも含まれている。」

「それと、シナ爺さん、その渾名はやめてくれ。“魔獣”なんて呼ばれて、喜ぶ奴はいないだろ」

物騒な通り名のわりに、本人は至極もつともな見解を持ち、賞賛

とは受け取らないことを知っていたからだ。

アナントル半島を治める、ドラランチスカ高原王国。

北はオローグ海、南にカップラス、西にミルザ海がある。三方を海に囲まれた国であるが、峰の連なりが随所に見られ、全体的に標高が高い。高原王国と名付く所以であった。

霊峰と呼び声高い山々が数多くある、ドラランチスカ。なかでも南沿岸部に沿うように横たわる山脈は人々の心を掴んでいた。

山脈の名は、トローン。西端はアナントル西南部の山岳地帯に始まり、東大陸へと延びて、隣接する半砂漠の国ビウロンの北方に東端を置く。しかし、極めて長大な山脈というわけではなく、他を圧倒する高さを誇るわけでもない。

それでも霊峰の一つに列せられるのは、北と南でそれぞれに気候を分かち、恵みをもたらす分水嶺であるからだだった。

夏場、トローン山脈以南の沿岸部は酷暑に見舞われるが、北の内陸部は湿潤な涼気を漂わせた。転じて冬場は、内陸部には豪雪と寒風をもたらし、南方を温暖な空気に包みこむ。

「一国に、二つの世界」を出現させるとして、トローン山脈は人々に崇拜に近い感情を抱かせていた。

また、トローン山脈は交易の要所でもあり、網の目のように交易路が敷かれている。商人だけのためではなく、避暑や避寒に峠越えをする旅人のためにも、トローンの交通の利便性は高く望まれ、幾多の街道と宿場が設けられた。

人が集まれば金銭も落ちる、ここで利益をあげている商人や税収を得るドラランチスカは、賛嘆を表さずにはられない。

そして、もう一つ。これは、敬う気持ちよりも畏れが強く出ていた。

ゴブリン、オーク、オーガー、数多の魔物はもとより、やたら好戦的な動物が存在している。山牛、山狗、猪獣など、他の地域なら

魔物ほど脅威きょういではない生き物が、トローン山脈かきに限かぎって危険な獣と化まっていた。

その獣たちの頂点あかくまに立つのが、赤熊あかくまであった。完全武装カバリアーの騎士カバリアーを二周りふたまわも大きくしたような巨大さ、小剣並みの牙ショートソード、槍ほなまきの穂先ほなまきのような爪。

赤熊を指して、人々は“トローンの暴君”、“赤い獣王”と呼んだ。気質がどうであるかは、その二つ名を聞けば想像かたに難くないだろう。出会えば最期、血に飢えた彼らを前に、せめて荷と荷を引く馬いけにえを生贄いけにえにして逃げるしかなく、それでも生還の可能性はかなり低い。

だが、赤熊は恐れであり、畏れとは違う。また別の理由があった。その赤熊に、短槍たんそう一本で立ち向かう狩人がいるのである。

彼らは“トローンの暴君”の毛皮を鎧とし、大きな頭を兜、大きな手足むかばきを行勝むかばきにして身にまとう。赤熊と戦っている場面を見れば、親熊と小熊のじゃれあいと思われるかもしれない。そこまで酷似こくじした格好をするのは、狩人たちが、赤熊を強さの象徴と捉とらえているからであるらしい。たった一人で、短槍一本で赤熊を仕留しとらめることができれば、仲間内で一人前と認められるのだと言われている。

余談ではあるが、腕に覚えのある者が「狩人にできるなら」と赤熊討伐いどに挑いどんでいる。そして、帰ってくる者は少なく、生還しても身体あじまのどこかを欠損あじましている有様であった。

トローン山脈という厳しい環境が、魔物を凌駕りょうがする生き物を創りあげた。その事実が人々に畏怖いふの念を抱かせ、その獰猛じつもうな動物たちの王たる“赤い獣王”さえも倒す狩人の一族は、より深い畏れを込めて“トローンの魔獣”と呼ばれるようになっていったのである。

ユウヒは、若いながらも一人前と認められた、“魔獣”たちの一員いちだった。

戦時下の魔物はしつこい。シナの言をまたず、だれもが分かっていることだった。

ゴブリンの性質は、「熱しやすく、冷めやすい」である。彼らは山野にひそむ盗賊に似て、目の前を通りがかつた人間を襲う。人を喰らうことはないが、持つ物すべてを略奪しようとする。食べ物、武器、さらには工芸品の類、彼らが生きていくに必要なかどうかなどに関わらない。流麗な長髪であれば、それも強奪の対象となり、二目と見られない惨たらしい死体が発見された例もある。

熱狂的に略奪を行うゴブリンどもは、しかし、戦える者と見えたとき、明らかに尻込みする。十数体に群れる彼らだが、味方が一体でも倒されると恐怖を伝染させて、あっさりと逃げ散ってしまうのだった。

オーガーなど、やや好戦的で人を喰らう魔物の対処は面倒だが、基本的には同じである。適当に撫でてやれば、さしたる害を被らずに済んだ。

「……だが、戦は魔物の士気まで上げやがる。普段と違って、狂暴さに磨きがかかるんだ。陣の後ろに兵站があるから、なおさらな。気合を入れて臨めと言ったはずだ」

髭面で赤ら顔のゴーパー隊長が、苦々しげに語った。口もとは引きつり、こめかみが小刻みに動いている。もともと赤い顔も、いまや黒と言ってよく、どれほどの失意が心情にあるか計り知れない。

その視線の先には、立つ者、座り込んでいる者、横になっている者、様々な姿勢で耳を傾けている若者たちがいる。統率できない無頼の兵士、というわけではない。ほぼ全員が身体に包帯を巻きつけ、何らかの怪我を負っていたのだ。負傷者のあいだを、医療部隊の女性兵士が慌しく動き回っている。

と、横になっている者の一人が意識を失ったらしく、呼びかける声が響き、ゴーパーの苦言を遮った。

「……役立たずの情弱者どもめつ、最近の学徒は魔物とも戦えんのか！」

髭面の隊長は、とうとう怒声を張り上げ、踵を返して幕営へと向かっていった。

短気な彼にしては、今回の爆発は遅い方だった。ゴーボリの傍らに立っていたシナは、荒々しく歩き去っていく後ろ姿を見送り、幕営の人だかりに消えたことを確認して、軽く溜め息を吐いた。

「ま、分からんでもないがね」

隊長が去り、緊張を解いた若者たちを見やって、シナ。落胆の色をこれでもかと表す彼らに、かける言葉もなかった。もとより、ない。

負傷者たちは、国立の学園に在籍する学生であり、卒業後、軍役に就く者たちである。それも、おそらくは幕僚の地位に。

野心家な平民、太平楽を並べる貴族とが入り混じった若者たちが、そのだれもが気位が高く、扱いにくいことこの上なかった。やもすると怒りがちなゴーボリは煙たい存在だが、このときばかりはシナも同情したものである。隊長が言ったように、話を聞かず、自信過剰なままで、兵站を狙ってきた魔物たちと対峙したのだから。惨たる結果に、今頃はゴーボリが上層部に絞られていることだろう。自分の統率する部隊の失敗であれば、肅然と責任を負うこともできるだろうが、血気に逸る学徒兵の指揮を押し付けられたうえにこの状態である。やり場のない思いが渦巻いているに違いない。

魔物の討伐に参加して、怪我らしい怪我がなかったのは、ゴーボリの補佐役である副隊長のシナと、負傷者たちと同じ幹部候補生のユウヒだけであった。

「……と。どこいったんだ、坊主は」

ゴーパーリの説教中、消沈した若者たちに混じって話を聞いていたはずなのだが、姿が見えなくなっていた。居丈高な候補生のなかにあってもユウヒはしおらしく、真面目な学徒であった。煙たい隊長の小言とは言え、話の途中で抜け出すなど考えられない。

周囲を見渡していたシナは、本陣から派遣された医療部隊の天幕内が、ずいぶん騒がしいことに気がついた。

「バツカやろうつ、ただの痣に魔法なんか使うな！」

「薬はただじゃないの、いいから大人しく座りなさい」

悲鳴を上げつつ天幕から転がり出てきたユウヒに、藍色の長い髪を丁寧に編んだ少女が掴みかかっていた。詰襟の白い布鎧を着た衛生兵は、静かに、だが有無を言わせぬ口調でユウヒを諭し、彼の腕を抱え込んで天幕に引き入れようとすする。

「こんなの、ほっといても治る！ 魔法はいやだ！」

「棍棒で殴られても、破傷風は発症するわ。あとで大変なことになったらどうするの」

駄々をこねるような、哀願の姿勢になった“魔獣”。しかし少女の方は頑として受け入れず、ユウヒを半ば引きずるようにして天幕へと連行していった。

「レイネ嬢ちゃんにかかつちゃ形無しだな、坊主は」

にたにたと人の悪い笑みを浮かべながら、シナも医療部隊の天幕へと入った。

“トローンの魔獣”と呼ばれるユウヒ、中背だが、身についた筋

肉は隆々としていいる。着痩せする体質で、外見からは分からないが、赤熊を担げるだけの膂力があつた。衛生兵の少女　　レイネを振り払えないわけがない。

「なに笑ってるんだよつ、シナ爺さん！　シナ爺さんからも言つてやつてくれよ！」

「『副隊長』でしょう、ユウヒ。気安いにもほどがあるわよ」

二人を見て、シナは他意もなく微笑んでしまった。ユウヒをからかつてやるうという気持ちは消え、少年と少女のやり取りを眺めていた気分になつた。

ユウヒ劣勢の口論は幕を閉じ、結局、魔法による治療をすることになつた。彼女の堅苦しさはゴーポリ以上に煙たく、ユウヒは苦手意識を顕わにしているが、本気で拒絶もできなかつたようだ。

レイネの華奢な手が患部　　素人目に見ても、ただの痣なのだが　　であるユウヒの腕に当てられ、螢火のような光が漏れでてきた。

「イエリエス、イエリエス……、……オレアトク」

人語ならぬ呟きのあと、織手を引くレイネ。黒目がちな双眸を近づけて患部を診察し、完治したことを患者に伝える。

「熱つちいー……」

ぼやいたユウヒの腕に、レイネの手形と思われる赤い痕が残つていた。腫れもの色ではなく、湯に浸かつていたかのような赤さである。やがて消える、魔法の痕跡の一種であつた。

「……また熱出たり、喉渴いたり、身体痒くなつたりするののか？」

「応急処置の魔法だから、そんなことにはならないわ。でも、水分だけはしっかり摂って」

魔法は万能ではないことが窺える会話である。

回復魔法自体は万能であると言ってよい。だが施される側、つまり患者の方にも負荷がかかった。ユウヒが言っているように、魔法による治療を受けた者は、なにかしら身体の異常を訴える。

それは、人間が持っている自然治癒力が魔法によって促進された証拠であり、そのつけでもあった。重大な異常ともなると、脳や臓器の機能が停止したりもする。本来ならば、多くの栄養と時間とをもって完治されるべき怪我が瞬く間に治ってしまうのだから、負荷もかかるうというものである。

極端な話、「重傷者を一瞬で完治させる」などと俗説で言われていることは不可能であった。重傷を完治できても、あとのつけを払いきれる体力など残っていないからだ。

それでも、傷の具合と患者の体力、その二つに気を付けていれば、魔法による治療は様々な利点を生み出した。なにより、医療機器や薬品が要らないという魔法の強みは、怪我人が続出する戦場にこそ生かされている。

「レイネ嬢ちゃん、他の奴らはどんな具合だ？」

ぶつぶつと文句を言っているユウヒを押し分け、聞くまでもないことだが、シナは藍色の少女に話し掛けた。「他の奴ら」とは、ユウヒ以外の学徒兵のことである。

「重傷者二名、命に別状はありませんが、手術が必要です。他の方は、強めの魔法で治療してもいいでしょう。ただ……」

「身体は治っても、気持ちは萎えたまま、ってか」

「自信家が挫折したときの落ち込みようは、見るに耐えませんか。」

僭越ながら、兵站警備を中止して、戦線を離脱させることをお勧め
します」

「はっは、手厳しいねえ、レイネ嬢ちゃん。……まあ、上層部もそ
れを決定してるだろうがな」

ひとしきり笑つと、シナはユウヒに顔を向けた。まだ彼は治療さ
れた腕をさすり、ぶつぶつと言っている。よほど魔法の治療がいや
だったらしく、身体のあちこちをまさぐりながら異常がないか調べ
ていた。

「坊主、どうするよ？ おめえは心身ともに元気だろ」

「どうするって、なにが？ 学徒兵が退くのなら、それに従うよ」

「仮にも、幹部候補生だろうが。いまなら、正規の軍隊に混じって
行動するだけで、一目置かれるんだぜ。うえの覚えもよくなるって
モンさ」

「あー……そういうことか」

この会話のあいだに、レイネが何度か肘鉄を喰らわしてきた。「
気安い」と小声で語りかけてきたが、どちらにもさして痛痒を感じ
ず、ユウヒは幕の天井を眺めて考えこむ。

「あとで、色々と陰口叩かれそうだしなあ」

「気に病むトコじゃねえだろうよ、それは。……なんていうか、坊
主は野心ってモンがねえよな」

「……それが魅力でもあるんですけどね」

ぼつりと漏らしたレイネ、拾ったシナと目が合つと、わずかに顔
を赤らませて任務へと戻っていった。

若さに羨望を抱きつつ、シナは微笑みながら彼女を見送った。怪
我とは言い難いユウヒをむりやり治療したり、素行の悪さを指摘し

たりするのは、その思いかららしい。堅苦しい性格だが、その辺りは年相応であった。
少女を焦がす少年は、それに気づいた風でもなく、うんうんと悩み続けている。

3

「だいたい、今回の戦は、戦にならないって話じゃなかったか？
居残る意味もないような気がするんだけど」

「ああ、ならねえよ。ならねえから、うえは兵士のやる気を見る余裕があんのさ」

ユウヒは残留を決定し、シナがゴーパー隊長にその旨を伝えた。
現在、ゴーパーの指揮する三百人の歩兵集団に加わっている。

ドランチス力軍の総数は十万、ゴーパー隊など一角ですらないが、幹部候補生であるユウヒの参戦は、陣営全体を驚かせた。学徒兵の出陣は珍しくもないが、兵站警護に止まっていれば、である。矢面に立つことなど、これまでの記録を紐解いても事例は見当たらないだろう。丁重に扱われるべき幹部候補生であるから、尚のこと。

「“トローンの魔獣”が、人間相手に武を競えるのかね……」

驚きとともに、ひがみにも思える、そんな声が周囲で囁かれていた。“トローンの魔獣”は畏怖されているが、同時に忌避されている。道理も通じるし、とくに好戦的な一族ではないものの、生活が自然に根付いたものであるために、蛮族と見ている人間が多かった。

自ずと耳にしたユウヒだったが、平然と聞き流している。「陰口を叩かれるのでは」と言っていた彼だが、それほど気にはしていない

かった。いまはもう戦線を離脱した幹部候補生たち、気位だけは一端な彼らのなかで、決して短いとは言えない学園生活を過ごしてきたのだ。ひがみやそねみなど、聞き飽きている。

「ほれ、坊主。あれが悪名高い、西の帝国キーツシリクの軍隊だ」

ゴーパーリの部隊を含めた第一陣、騎兵一万と歩兵二万は、ゆるやかな丘陵に壁の如く並んでいる。ユウヒたちはちょうど小高い丘の上に整列したため、敵国キーツシリクの陣容が窺えた。

彼らも丘陵に沿って立ち並び、銀色の波頭を連ねている。長槍や長柄の斧が太陽に煌めき、「銀の穂波」と言われる所以をユウヒは見た。聞いた話と実際に見るとでは、理解のしやすさも違うな、と本筋から離れたことを考えている。

「……肝が据わってんな、坊主。初陣の奴あ、この光景を見て、たいていすぐみあがるもんだがよ」

「あ？ ああ、そうだな。あれとぶつかると考えると、少し怖い気もする」

そう口にしたが、ユウヒの顔色や態度には、微塵も恐怖がなかった。若者にありがちな「血気に逸って武者震い」、それもない。どこまでも澄んだ瞳で敵陣を眺めていた。

「大物が、バカか……。前者であってほしいもんだな」

呆れたような目で少年兵を見つめ、シナは独白した。望んで“赤い獣王”の前に立つような人種である、人間などいくら集まろうが関係ない、と思っっているのかもしれない。もしそうなら、彼は後者ということになる。

幸い、ユウヒは常識を持った“魔獣”であった。

「なあ、シナ爺さん。キーツシリク兵は強いのか？」
「……弱くはない。だが、将が戦上手じゃねえ。数に恃んだ突撃し
かしねえな。少なくとも、俺が経験したキーツシリク戦はそんな感
じだったぜ」
「数、ね……。このただっ広い草原で、他にどんな戦い方ができる
んだ？」

寡黙で屈強な兵士たちに囲まれても、ユウヒは感化されるという
ことがないらしい。黙然と整列しているなかで、学業に勤しむ“魔
獣”は歴戦の老兵に教えを請う。時と場合を考慮しろ、とはだれも
言わない。ユウヒが幹部候補生であることはみなが知るところであ
るし、戦端が開かれぬ戦でもある。耳を澄ませば、そこかしこで私
語はあつた。

「第一に機動力、つまり騎兵だな、これが戦況を左右する要になる。
側面や後方に回り込んで攻撃できたら、まあ、勝敗は決したと思っ
ていい」

「騎兵を警戒して、防御を固められたらどうするんだ？」

「言つたら、機動力が要だって。防御を固めるにしたって、陣全体
をまんべんなく守れるわきゃねえ。動き回って、相手をひつかきま
わしや、それでまずは成功さ」

「……そのあと、歩兵を投入する？」

「ご名答。第二に重要なのは、歩兵の質と装備。ぶつかりあいに、
策もなにもありやしねえ、突っ込んで武器を振りまわすだけの戦い
だからな。丈夫な鎧、丈夫な剣、丈夫な身体と、それさえありやい
い」

シナの独学なのだろうか、ユウヒが習った用兵学とは少し違つて
いた。だが、血の通つた話は、幹部候補生にとって、よい肥やしで

あつたようだ。屋内での勉強よりも、すんなりと頭に染み込み、いくつもの質問が浮かび上がっていた。

「敵も騎兵を用いて、歩兵も充実していたら？」

「第三の要を生かさなきゃならねえ。それが、將のうつわって奴さ。戦況を読んで、兵を巧みに動かせるか。騎兵をどう動かして、歩兵をどの時点^{じてん}で投入するか。他にも考えなきゃいけないことは、たくさんあるぜ？」

言い終えて、シナはにやりと笑って肩をすくめる。言外に、ユウヒを哀れんでいた。もちろん、質問を繰り返すことに、ではない。

勤勉な少年は、いずれ指揮官となる人材であり、どの程度の部隊を預かることになるかは分からないが、少なくとも自らの判断で数百の生命を左右する軍位を得るだろう。

俺ならそんな重圧はごめんだな、と副隊長に甘んじている老兵の目は語っていた。

キーツシリク軍を遠望しつつ、シナに用兵術を教授されていたユウヒは、にわかに湧きあがった鬨^{とぎ}の声に身を硬くした。

周囲を見れば、兵士たちが陣の後方に向けて武器を振りまわしている。なにごとかとユウヒも振り仰いでみたが、林立するたくましい腕と銀光の束で窺^{うかが}うこともできない。

上背のない少年は目視することを諦め、すなおに副隊長に尋ねた。

「だれか、えらい指揮官でも来たのか？」

「おお、そりゃあもつ、どえらいさ」

そう茶化すならたいした人物でもないか、と思っていたユウヒが目にしたのは、裝飾過多な戦車であった。四頭の馬に引かれたそれ

には、完全武装の騎士が三人と御者二名。
そして、きらびやかな鎧を着した一人の少女が乗っていた。

「……あれは、国王陛下の……」
「おう、公妹殿下ユキア様だな」
「たしかにどえらいな……」

シナは身分のことを言っていたのではなかった。

戦場に姫君が、しかもユウヒよりも年下であるはずの童女が現れたのは、ただごとではない。

本来、この戦場にあるべきは、ドランスチカ国王ラオニー三世の
はずである。とくに武を好む人物ではないが、激励の来臨は王者の
義務。ゆえあつて臨めぬとしても、年端もいかない公妹を遣わすこ
とはないだろう。

少年は首を捻り、その様子を横目で見ていたシナは、苦く笑いな
がら回答する。

「坊主、ユキア姫が戦場にいらつしやるのは、恒例なんだぜ」
「……は？ 戦のたびに、姫が来てる……らつしやるのか？」

正規の軍列に並んだことがないユウヒに知る由もなかった。

「戦にならない戦」は、ここ数年続いている。キーツシリック帝国
が出兵を繰り返すのは、いわゆる武力外交であり、その内容は、政
治や経済での軋轢の緩和などを旨とした会議であった。

対し、ドランチスカも軍容を整えて相対する。「あくまで話し合
い」とはいえ、矛先をそろえた国の外交手段に、無防備で赴くなど
愚の骨頂であるし、第一に、ドランチスカはキーツシリック帝国より
独立した国であった。完全に信用していない、が正しい。

なにせよ、両国が兵士を並べても、戦うことは本意ではなかつ
た。ゆえにユキア姫が国王代理として官僚を率い、キーツシリックと

の間に設けた即席の議場に出席できたのだった。

それでも年若い姫君を送り出すのは、納得し難いことであるが。シナの言った「どえらい」とは、国王に対する皮肉だったのかもしれない。

その国王の思惑など知ったことではないユウヒは、いささか間の抜けた質問をした。

「……独立？ ドランチスカが？ そんなことがあったのか」

「おいおい、幹部候補生。自国の歴史ぐらい、しっかり勉強しておけよな」

「キーツシリクが二回、ドランチスカに侵攻してたつてのは知っているけど……」

「そりゃ独立後だ」

熱心だがものを知らない生徒に、老獪な教師は短く答えた。

珍しく軽口もなく簡潔に答えられて、ユウヒは訝しげにシナを見やった。これもまた珍しく、生真面目な表情をたたえて背筋を伸ばし、さながら老将といった体でたたずんでいる。

まもなく、理由が明らかになった。

「公妹殿下の御前である！ ゴーボリ隊、拝跪せよ！」

いつものまにかユキア姫の戦車がユウヒたちの目の前にあり、完全武装の騎士が声高に告げた。三百人が一斉に膝をつき、精悍な兵士たちはうやうやしく頭を垂れた。

他の隊より低くなった人間たちのなかで、一瞬遅れて跪いたユウヒは、目の端でシナを睨む。気づいていて教えなかったのは、ユウヒの反応を楽しむためだったのだらう。老兵の口がわずかに歪んでいるのが見えた。

「……来る年、ミール学園を卒業する学徒兵が参戦した、と聞き及びましたが」

「学徒兵ユウヒ、御前にまかり出よ！」

ユキア姫に問われたゴーボリは、自らの隊をかえりみて声を張り上げた。当の本人は突然のことに口を開け放して呆然としている。一応、貴人に対する礼儀作法を習ってはいたが、慣れない動作はとっさにできるものではないらしい。

「……中腰のまま進んで、隊長に並べ。なに言われても、はいはい言ってりゃいい」

シナが正気づかせ、ようやくユウヒは動き出した。もともと尊卑そんぴの念が薄いユウヒは、作法を実施するに忍びなく、シナの言葉通りにしかできないわけだが。

「兵站警備の折り、ふがない戦果のなかで一人、果敢に立ち向かったという話を聞いています。さすが、“トローンの魔獣”ですね」「……は」

どこか演技じみている姫君だが、賞賛は本物だったようだ。シナのようにあてこすりもなく、本気で“魔獣”の名を名誉ある称号と捉えているらしい。少し返事が遅れたユウヒの心中に気づいた様子もなく、ユキア姫は淡々と言葉をつむぐ。

「その勇猛さをもって忠臣とされることを期待します。このたびの出兵で、さらなる武功を挙げることはできませんが、……せめて我々の警護をお願いしたいと思います。いかがですか？」

この問いに「はいはい言ってりゃいい」「わけではないことはユ

ウヒにも分かる。ゴーボリを無視してすすめられる話ではなく、わずかに顔をめぐらせて窺^{うかが}うと、彼は小刻みに頭を上下させていた。

「……謹んで、お受けいたします」

越権^{えっけん}行為にはならないと判断し、ユウヒは精一杯うやうやしく答えた。

「ゴーボリ隊、進軍準備！ 公妹殿下を守りまいらせよ！」

いつもどこかに怒気を孕^{はら}ませている赤ら顔の隊長は、喜々として大声を張りあげた。王族の警護は、軍人にとって誉^{ほま}れ高いことなのだろう。後にゴーボリは、「学徒兵を率いて、初めて良いことがあった」と漏らしている。

三百人の喚声^{かんせい}があがり、甲冑^{かっちゅう}の音を響かせて、銀光が空に突きあげられた。姫の戦車に、親衛隊である重厚な鎧をつけた騎馬と歩兵が続き、そのあとをゴーボリ隊が追う。華やかさがまるでない一団だが、精悍さにおいては劣らない。隊長をはじめとしたたたきあげの兵士たちである、これ以上の名誉はないと、土気も盛んであった。姫を追って息巻く集団のなか、ユウヒの隣りを走る老兵は意味ありげに笑っている。

「戦わずして、一部隊に功を挙げさせたか。居残って良かったる？ 幹部候補生」

それは皮肉なのか、すなおな感嘆なのか、ユウヒには分かりかねた。

ただ、功を挙げるにも様々あるものだな、と戦いを能^よくする“魔獣”は感心している。相変わらず勉学の一環として考え、シナの言葉^{ことば}を及第点と受け取っていた。

「魔獣の初陣」後編に続く

第一話 「魔獣の初陣」 後編（前書き）

無駄に細かいですので、休憩を挟んで読んで下さい。

第一話 「魔獣の初陣」 後編

4

アナントル半島の北西部から狭隘な陸地がのび、天然の掛け橋となつて大陸の西側へと続いている。北のオローグ海と西のミルザ海を繋ぐ海峡もあるが、バズース大橋により交易商人や旅人たちは大陸の東西を歩いて渡ることが可能であつた。

バズース大橋を中心に成り立つ街スタンプレは、ゆえに、交易の都となり得た。

大陸は広く、旅する手段を選ばぬと言つのであれば、いくらでも道はある。オローグ海より北の交易路、南のカップラス海に行く航路。スタンプレを通過せずに大陸を行き来するなら、その二つが主な交易路であつた。

しかし、北の街道は厳寒な土地柄で、歩いて行くには季節が限られる。盗賊やゴ布林などの危険も多く、北の大帝国アヴェールの道中と言えど安心はできなかった。

対し、カップラス海の航路は安全性において他を圧倒する。が、船の所有者はたいがい豪商や貴族であるため、一度の航行に使われる金額が莫大であつた。旅から旅へと暮らす者たちやしがたない商人が手の出せる道程ではない。

よつて交易の都スタンプレは、多くの異人種と異文化が集まるよつになつていった。

街道ごとに異文化の華が咲き乱れ、雑多な人間と物が溢れかえり、様々な文書や言語が飛び交つた。見たことのない動物がいれば、味わつたことのない香辛料があり、聞いたこともない叙情の詩が聞こえてくる。急ぐ旅路でない者は、この都での滞在を延期し、あるいは永住の土地とした。

“華やかなるスタンブレ”。

それが、五十余年前までの交易の都であった。

「ドラランチス力歴二〇五年……か。キーツシリクが攻めてきたのは」

ユキア姫に護衛を依頼されたゴーボリ隊三百人は、即席の草原の議場の一角に陣を敷いている。公妹殿下の親衛隊の陣から離れ、万が一のときは遊撃隊として戦いに臨むことになる。

歩兵ばかりの集団に遊撃など務まるはずもないが、それも「戦にならぬ戦」であるための太平楽なのだろう。あるいは、外見も中身もお堅い親衛隊の不機嫌さが露呈した仕業であるかもしれない。「姫のご厚情とはいえ、下端どもが親衛隊の陣に参入とは」と。

そうした雰囲気は親衛隊から感じられたが、目くじらを立てて對抗心を燃やす者はゴーボリ隊にはいなかった。

もとい、気にするような余裕はなかった。

隊長のゴーボリは眼前のキーツシリク兵を睨みすえ、微動だもしない。彼の部下たちも同じく、いつも以上に表情を険しくしていた。平時、武功を挙げる機会は少なく、破格の名誉である王族の警護に臨む士気の高ぶりが窺える。たたきあげ独特の気迫は、炎が揺らぎ立っているかのようにであった。

対照的に、ユウヒとシナはとくに気負いもせず、のんびりと会話をしていた。

尊卑の念が薄く、しゃちこぼる性格でもないユウヒは、ときどき軽い毒を吐く老兵にドラランチス力の歴史を教授されている。

「えーつと、今がドラランチス力歴二五七年だから……五二年前か」

「俺が坊主くらい頃だ。あのときのドラランチス力独立・解放戦が、俺の正式な初陣だったな」

「へえ、十六歳か……。ん、五二年……？ シナ爺さん、もうすぐ七十歳なのか!？」

「……まだ、六八だ。つてか、見りや分かんたる、この白髪頭をよ」
手櫛てくしで白くなった頭髪を撫なでて、シナは咳払いをした。ゴーボリ以下、周囲の人間に刺々とげとげしい視線を受け、ユウヒは声を抑える。

「……で？ その頃のスタンプレは、まだドラランチスカ統治下だったんだろ？ なのに独立つて、おかしくないか？」
「簡単な話じゃねえかよ、分かんねえか？」

……突如とつし、国境を越えてドラランチスカに侵攻してきたキーツシリクは、スタンプレの西に広がるメラスナー平原に陣を展開した。迎え撃つべく、ドラランチスカも十万の大軍を派兵、メラスナー平原に布陣した。

しかし、このときのキーツシリクはドラランチスカと矛先ほこひなを交えるつもりはなかった。

西の海ミルザの先にはバールツクという半島があり、ドラランチスカの友邦ゆうほうペイルバネス連合国がある。キーツシリクの目的はペイルバネスの制圧だった。メラスナー平原に展開された陣は陽動やうどうだったのである。

ペイルバネスを陥落かんらくすれば、ミルザ海、及び迂回うかいして南の海カツプラスからドラランチスカに攻め入ることができる。ドラランチスカとペイルバネスが連携れんけいしてキーツシリクに対抗すれば厄介やっかいだったのだらう。ドラランチスカをメラスナー平原に誘い出し、その間かんにドラランチスカの援軍を期待できないペイルバネスを落とす考えだった。

そして、それは現実となり、ペイルバネスは瞬またたく間に陥落、ドラランチスカは北西、西、南西から猛攻もうこうを受けることになってしまった。メラスナー平原に軍のほとんどを出兵させたドラランチスカは、慌ててアナントル半島の西・南西沿岸部へと軍を配置はいちし直すも、時す

でに遅く、ミルザ海・カップラス海から侵攻してきたキーツシリクの上陸を許してしまった。

さらに、軍容の薄くなつたメラスナー平原のドラランチス力軍は、自国の歴史と周辺諸国に類を見ないほどの大敗を喫した。四方を包み込まれて塵殺、十万人が五万人に削減されたとはいえ、生き残つたドラランチス力兵は一人もいなかったのである。

阻む者もなく、北西から進軍してきたキーツシリクはドラランチスカの王都ウイグリムへと到達した。沿岸部へと転戦を命じられた五万のドラランチスカ兵がいたものの、キーツシリク水軍の攻撃に釘付けにされてウイグリムの救援に駆けつけることもできない。

ドラランチス力軍は翻弄され続け、全力を出し切ることも適わず、王都ウイグリムは陥落。

ドラランチスカ歴二〇五年、春。

こうして、ドラランチスカは滅びた。

5

「……え、滅んだのか？」

「ああ、一応な。当時の国王がメラスナー平原の殲滅で戦死、世継ぎの王太子殿下も王都ウイグリム陥落後に処刑される。王妃や殿下の弟妹は殺されなかったが、他の王族も含めてバラバラに幽閉された」

王族の血は絶えた。それを知り、ドラランチスカの諸侯は抵抗をやめ、キーツシリクの軍門に下つた。アナントル半島の各所で規模の小さい抵抗戦があつたものの、キーツシリクは征服から統治へと体制を移行させていった。

しかし、ここでキーツシリクの足並みが乱れてくる。

シナの言う「悪名高いキーツシリク」の所以は、ドラランチスカに侵攻してきた大義名分に表れている。

「魔に仕える者どもを討ち果たし、神の威光を示す……だとさ」

「なんだ、それ。むちゃくちゃだ」

それは内治外征ないちがいせいの実権のほとんどを聖職者が握っている、“神聖キーツシリク帝国の常套手段じょうたうしゅんであった。

確かにユウヒの言う通り「むちゃくちゃ」なのだが、キーツシリクに限らず、攻め寄せる国の大義名分などこじつけが当たり前なのである。キーツシリクにしてみれば、それを建前たてまえに豊かなアナントル半島を治めたかったのだらう。事実、王都を攻め落とし、王太子と重臣数名を処刑した後は、これといった肅清しよくせいはなかった。ドラランチスカ国民への暴力や掠奪もなく、ただ淡々と経営改革を進めていた。

だが、聖職者たちは違った。想定されていた戦のほとんどが終了した頃になって、彼らはキーツシリク教会軍を率ひきいて乗り込んできた。先のキーツシリク軍 純粹に軍人から成る帝国軍 と異なり、破壊と暴虐を撒き散らしたのである。

「まず、その矛先が向かったのが……」

「“華やかなるスタンブレ”、か」

「おおよ。実際に見てねえが、聞いた話だけでも胸クソ悪くなったぜ」

教会軍の行動は残虐を極めた。武器も持たぬ、抵抗もできぬ人間を片端かたはしから斬り捨て、貫き、叩き潰し、馬蹄ばていで踏みつけた。女、子供、老人の区別なく殺戮さつりくをくり返し、ときにはバース大橋から海峡へと投げ落したり、火を放った家屋に閉じ込めたり、ひたすら

殺人を愉しんでいるかのようであったという。

「教会軍曰く、異教徒は、異教徒の街は、異教徒の文化は、魔の理から成るもの。魔は灰燼に帰すべし、その上に“神”が正しき理を芽吹かせるであろう……とか言っただけならいいな」

「……なんだよ、その理論……」

ふつふつと怒りが湧いてきているユウヒは、剣呑な視線をキーツシリクの陣営に向けた。

並んだまま動きを見せないキーツシリク軍の上に、彼らの軍旗がはためいている。翼を広げた鳥のような、両手を空に向けたような、奇怪な紋様であった。シナの話聞いた後では、その奇怪さもより怪しく見えた。

奮然とするユウヒに対し、当時の経験者であるシナは淡々と語り続ける。

「……それから、ドラランチス力独立・解放戦が起きた」

“スタンブレ事件”の報せがアナントル半島を駆けめぐり、戦慄と恐怖と怒りを抱いたドラランチス力の民たち。各地で決起し、処刑されずに幽閉されていた王家の人間を救い出した。それによって、服従の意思を見せていたドラランチス力の将校も立ち上がり、再びドラランチス力軍が集結したのであった。

王都ウイグリムの南、トローン山脈の北部にある城塞都市ミーミルを拠点に、ドラランチス力独立・解放戦は勃発した。

開戦直後からドラランチス力劣勢であった。無理もない話で、再集結したドラランチス力軍は四万、キーツシリク軍は後続の教会軍を含めて二十五万である。

負ければ、今度こそドラランチス力は滅びる。しかし、奮戦の甲斐なくドラランチス力軍は数を減らし、救い出した王族も一人また一人

と敵の刃にさらされていった。

やむなくドラランチス力軍はトローン山脈に身を潜め、遊撃戦へと変えていった。が、消極的な戦法はキーツシリク軍にさしたる打撃も混乱も与えられず、ひたすら窮地に追い込まれた。

拠点にしていたミール城塞都市にキーツシリク教会軍十五万が居座り、山狩りが開始された。もはやドラランチス力軍は盗賊扱い、相手が相手であるだけに和を講ずることもできない。

ドラランチス力王家の最後の一人、内親王ス力カは自ら剣を手にして玉砕を覚悟していたという。

人手が足らず、初陣ながらもスズカ王女の側仕えであったシナは、彼女の覚悟に忪えて、迫ってくる教会軍へと突撃した。

「その後のこたあ……鮮やかすぎて、よく覚えちゃいねえんだよな

「鮮やか、つてなにが？」

剣を振りかざして木々の並ぶ斜面を駆け下り、眼前に迫るキーツシリク兵に斬りかかろうとして

赤い動物が落ちてきた。

それが飛び退いたとき、シナが斬りかかろうとしていたキーツシリク兵は、胸から血潮をふき上げて斜面を転がっていった。呆然とするシナの周囲に、いくつもの赤い動物が飛び回り、走り、短槍を閃かせていた。草を刈るように、その言葉通りにキーツシリク兵はなぎ倒されていった。

しばらくして、その場に残されたスズカ王女やシナたちは、ようやく現状を掴み始めていた。

「ありやあ、“トローンの魔獣”だったんだ」

「へー!? 俺たち?」

「おお、坊主の爺さん世代だろうな。それまで、どんな戦だろうと

関与しなかった“トローンの魔獣”が、どういつつもりが敗色濃厚な戦に初陣ときた」

「鮮やか」なのは、その後の経緯にも言えた。

虫の息だったドラランチス力軍は、なぜか参戦した“トローンの魔獣”の援軍で息を吹き返し、山狩りの教会軍を阻み続ける。さすがに打って出ることはできなかったが、十五万ものキーツシリク教会軍の進攻を停滞させる奮戦ぶりであった。

そして思いがけない恩恵をもたらされた。

王都に駐屯していた帝国軍十万が、にわか反旗を翻したのである。理由は様々あるだろうが、なんとと言っても“スタンブレ事件”が腹に据えかねていたのだろう。彼らは教会軍と違い、支配して富を徴収するのが目的だったのだから。

それ以前から聖職者たちの横暴に不満を抱いてきたらしく、“スタンブレ事件”で我慢の堤防から不満の水が溢れだし、十五万の教会軍を相手に奮戦するドラランチス力軍五千　ほとんどが“トローンの魔獣”　の勇姿が決壊を促したのだった。

数で勝る教会軍だが、腹背を攻め立てられて一気に形勢は逆転した。十五万が五万に満たない人数に討ち減らされ、主だった聖職者は処刑された。キーツシリクへと逃げ延びた者も少なくないが、今日明日で報復戦を挑めるほどの力もなく、一応はキーツシリク教会軍の脅威を一掃することができたのだった。

このとき、ドラランチス力歴二〇五年、冬。

キーツシリクが攻め込んでから、わずか十ヶ月後のことである。

っているとき、草原の議場には役者が揃っていた。

ドラランチス力高原王国国王ラオニー三世の代理、公妹ユキア姫。

神聖キーツシリク帝国東部、ボンボラド地方領主ウエルセーク老
公。

神聖キーツシリク帝国東南部、バルック半島ペイルバネス地方
領主リユーゲル公。

「……相も変わらず、ラオニー陛下は慎重であらせられるな」

「リユーゲル様も、相変わらず皮と肉のお好きな方。兄王は余分な脂肪はついておりませぬが、若く、女の身であるがゆえ、わたくしの方が美味しゅうございますよ?」

「ぶっ……ははは! ユキア殿下は少々、香辛料が効きすぎている
のでは? 余人の喰える皮と肉ではございますまい」

渋い顔つきで壮年の男性リユーゲルが口を開くと、やや赤味を帯
びた金髪を揺らしてユキア姫が返した。童女とは思えぬ言葉と振る
舞いに、白髪頭を後ろへと撫でつけた老人ウエルセークは笑い声を
上げる。

ウエルセークの物言いに、リユーゲルは何か感じるものがあつた
らしく、渋い顔を険悪なものに変えた。

「ボンボルド領主公、いまの言は……!」

「ほれ、それだ。いちいち目くじらを立てては、交渉も会議もない
のではないか、ペイルバネス領主公。第一、余人が喰えぬ、という
もの無理もない話よ。嬢ちゃん好みは俺以外におるまい」

「ペド具合もよろしいようですね、ウエルセーク様?」

とりあえず表面上はにこやかに、ユキア。心身ともに楽しんでい
るらしいウエルセークは、手痛く返されても呵呵と笑い飛ばす。や
り込められたリユーゲルは苦々しげな面持ちで、いまにも馬首をめ

ぐらせて議場を後にしそうな雰囲気であった。

「……さっさと始めようではありませんか」

「せっかちだの、リユーゲル卿」

「異論はございませんわね、ウエルセーク様？　ただ、ドラランチス力側からご報告を申し上げることはとくにありません」

そう言ったユキアは、傍らに控えていた官僚の手からいくつか書簡を受け取り、野原には不釣りあいな豪華な円卓へと並べた。

それらはドラランチス力国内の情勢、流通や経済、軍備規模など事細かに　さすがに機密事項まで掲載してはいないが　記されてあった。ドラランチス力が独立・解放されて以来、それがキーツシリクの干渉を避けるための手段として用いられている。

当初こそ、「敵に手の内をさらすような真似を」と猛抗議が相次いだ。だが、キーツシリクがどのような策を弄したのか、独立後のドラランチス力王国の女王スズカを納得させてしまっていた。そして、現在まで慣例となっているのである。

もちろん、情報を提示する義務を果たした以上、ドラランチス力側もキーツシリクに権利を主張することができる。

装飾過多な戦車から降りたユキアは、円卓に同じく、豪華な椅子を用意させた。鎧姿なのに、ふわりと音もなく座ると、

「では、ペイルバネス領主公、ボンボルド領主公。キーツシリク南岸地帯と内陸東部の情報を提示して頂けますか？」

「……殿下もせっかちですなあ」

「畏れながら、公妹殿下。報告することはない、とおっしゃられたが……、あの者の説明は聞いておりませぬ」

リユーゲルは戦場に使われる床几に腰掛け、訝しげに、というより詰問に近い口調で声をあげた。

問われ、ユキアは初めて歳相応としそふじうの顔つきで小首を傾げた。周囲の官僚たちを見上げてリユーゲルの言わんとすることの意味を問い、しかし、彼らも顔を見合わせている。

質素だが大きな背もたれのついた椅子に座った老人、ウエルセークは理解していた。

「あー、懐かしくも腹立たしい顔がある……。生きてやがったか、あの若造が」

言葉の後半に物騒ひびな響きがあつたが、それを語るウエルセークの表情は柔やわらかである。

官僚や親衛隊にウエルセークと面識のある若い者などいただろうか、とユキアは振り返った。

目にしたのは、ゴーボリ隊。その副隊長シナ。

祖母ススカの頃からドラランチスカに忠誠を誓う老兵であり、本人が出世を望まず、いまだ副隊長とど止まりの兵士。その気になれば、一軍の将さえ務められるだろうと祖母は苦笑して言っていたことを思い出した。

年齢的には合う。

「古参の兵士、シナですね……。彼は先々代よりの忠臣、いまになつて説明とは？」

「いや、それはわたしの個人の話。リユーゲル卿の言う人物は、そのとなりでしょう」

シナのとなりには、ユウヒがいる。

幹部候補生としてミール学園に入学し、卒業後は上位階級の軍に配属される、未来を嘱望じゆくぼうされた少年。相手がゴ布林とはいえ、ほとんど無傷で圧勝した戦士。兵の扱いが上手いかどうかは不明瞭ふめいりょうであるが、勤勉であるらしく、それなりの将になれるだろう。

それほどまでに有名であったのだろうか、ユキアはリューゲルを見返した。

「ドランチスカの鎧に身を包んでいようとも、あの赤髪と風変わりな武器を見紛えるはずもない」

遠くユウヒに向けられていた視線がユキアへと移り、苦々しげに口を開いて、だが途端に表情を緩めた。穏やかに、ではなく哀れんでいるかのような。

大人びた童女は機微にさとく、リューゲルを見る目に険を滲ませた。言葉にせず説明を求める彼女、しかし目をそらした壮年の領主に答える気はないようだった。

いよいよ柳眉を逆立てたユキアは問い詰めようと口を開く。

「いちいち目くじらを立てては、交渉も会議もない。そう申しましたぞ、殿下」

老人は青い瞳で見つめ、ユキアに身を引かせる。横目でリューゲルを睨みつつ、顎を撫でながら彼の代わりに答えはじめた。

「リューゲル卿の言わんとすることは、あー……、「トローンの魔獣」は我々キーツシリクにとって、本当の“魔獣”である……。そう言いたいですよ」

「本当の……“魔獣”？」

「左様です、ユキア殿下。知っておられましょうか、五十余年前のドランチスカ独立・解放戦争のことを。その際、ドランチスカ側を勝利に導いたのは、彼の者たちでした」

自分の国の歴史は一通り勉強しているユキアは、敵国の老将に言われるまでもなく知っていたが、殊勝に頷いた。

なんらかの理由があつたのか定かでないが、キーツシリック教会軍によつて窮地に立たされた女王スズカの内親王時代、彼女の活路を開いたのは“トローンの魔獣”であつた。反旗を翻した軍人から成るキーツシリック帝国軍とスズカたちを結びつけ、教会軍を一掃させた影の功労者とも言われる。

そこまで思い出して、ユキアは息を飲んだ。

「貴方がたにとって“トローンの魔獣”は、その、……気持ちの良いものではないのですね」

他になんと例えればよいのか分からず、ごく簡単な言葉になつた。だが、キーツシリック人に見れば、そんな言葉では推し量れぬほどの忌嫌が胸中にあるのだろう。ウエルセークはともかく、リユージェルの反応を見る限り、ユウヒたち“トローンの魔獣”を悪鬼の如く考えていることは明らかであつた。

国王ラオニー三世の代理は、ユウヒを連れて来たことは軽挙だつたと悔やみ、半面、馬鹿馬鹿しさに呆れかえっている。

キーツシリックが敗走した原因は、“トローンの魔獣”の参戦よりも、帝国軍が寝返つたことにあるだろう。まっとうな史家なら、あるいはおおまかに推移を知る者ならそう結論づける。

キーツシリック教会の横暴さが、敗戦の責任転嫁にも及んでいたか。ユキアは外交官として恐縮するべきか、ドラランチスカ王族の一人として笑い飛ばすべきか、判断に迷つた。

結局は何の言葉も出せず、敵ながら情けない、という表情が出ていたようだった。

「……そんなお顔はなさらないでください、我々として理解はしております。ですがキーツシリック教会に依存する者ほど、その考えに染まり、彼らを悪魔の化身と忌んでおるのです。ご存知のとおり、キーツシリックの民のほとんどが教会の教えに従う者たちなれば……」

ドラランチスカへの敵対感情は、未だに最高潮ということらしい。ドラランチスカ独立・解放戦より現在まで、二度の大戦と無数の小競りあい起きています。最近はこれといった武力衝突もないが、油断はできない状況に改めてユキアを慄然とさせた。

“トローンの魔獣”は平時無害である、そのことをキーツシリク全土に広めてもらうよう打診しようかとユキアは思案する。簡単なことではないだろうが、それでもなければドラランチスカの軍事力向上に支障をきたすことになるのだ。

祖母スズカの時代に比べ、ドラランチスカはずいぶんと強兵になったが、周辺諸国と比較すればまだまだ弱兵の集団であった。キーツシリクはもとより、いまは友好な関係のアヴェール大帝国も脅威にならないとは言えない。諸国を凌駕する富国ドラランチスカであるが、それを軍備拡大に費やせば様々な問題が浮上するだろうし、なにより軍事力の兵士の質の底上げにはならなかった。

土台から強靱にしていく。そのために、ドラランチスカ軍隊に“トローンの魔獣”を起用することになったのだ。

ユウヒは試験段階、初めの“魔獣兵士”なのである。しかし、ユウヒに対するリューゲルの感情は、「気持ちの良いものではない」どころではないようだ。単純に悪意を抱いているだけではなく、また別な思惑が渦巻いているのが目に見えた。

「……少々、お言葉が足りませぬな、ボンボルド領主公」

床几から立ち上がり、リューゲル。どこか挑発的にユキアとウェルセークを見下ろし、再びユウヒへと視線を飛ばす。

「彼の者の参戦、これはキーツシリクへの宣戦布告。……キーツシリク教会が、どうしてどうして、悪鬼を前に奮い立たずにおられましようか？」

第二話「黒猫たちの学び舎」前編に続く

第一話 「魔獣の初陣」 後編（後書き）

では、また一カ月後くらいに……。

第二話 「黒猫たちの学び舎」 前編（前書き）

長くて細かいので、適度に休憩しながら読んで下さい。

第二話 「黒猫たちの学び舎」 前編

1

果てなどないかのように広がる原野は、緩やかながらも起伏が多く、灌木と喬木の森林がまばらに群生していた。緑野の絨毯は濃淡鮮やかに、加えて自生する色とりどりの花々も彩を添えている。冬から目覚めたばかりの植物たちは一気に萌生し、春を謳歌し始めていた。

色濃くなる季節に向けて、まだまだ成長していくだろう自然の住人たちの中を、黄ばんだ土をむき出した道が縦横に走っている。旅から旅へと暮らす者が踏みしめて作った、いわゆる交易路であった。もとは粗悪な道であったが、現在は草原の隆起を極力避けて作られ、道幅も広く、地均しされてもいる。簡易の宿駅も存在し、交易の国ドラランチス力はトローン山脈のみならず、アナントル内陸部の交通の利便性にも心砕いていた。屯道兵の駐在所も数多く設置されており、そのため道中の治安は良く、盗賊や魔物の襲来などほとんどない。

ゆえに、この時期のドラランチスを旅する者の歩みは遅くなった。日差しは柔らかく、吹く風も心地よい。蒼穹を行く雲一つ一つを眺めながら歩く余裕さえある。普段は寡黙に歩き続ける商人旅団も、どこか浮かれた様子で笑い声を上げて、さながら物見遊山の一行であった。

が、なかには例外もいた。

「ぶつう〜……」

商人旅団キャラバンの最後尾で、赤髪の少年　ユウヒは深い溜め息を吐いた。隣を歩く藍色あいいろの少女レイネも小さく溜め息を吐く。前者は失望の色が濃く、後者は呆れあきの感情がにじんでいた。

「……こつちまで気が滅入めいじるからやめて」

黒曜石のような色の瞳に睨にらまれたユウヒは、しかし再び溜め息を吐いた。春の陽気はまだ弱いとはいえ、彼は愛用の“赤い獣王”の毛皮を身に着け、数歩歩くたびに襟元えりもとの毛並みを揺らしている。さらにつつむき加減で歩いているため、“トローンの暴君”と酷似こくじした赤い髪は毛皮に埋うもれてしまい、どこからがユウヒでどこまでが毛皮なのか分からなくなっていた。

深く赤い瞳のユウヒに色は出でず、やはりレイネも再び溜め息を吐いた。彼女はミール学園指定の黒い外套マントを羽織っている。装飾は多少あるものの、やはり質素な印象はあり、場合によっては喪服もふくにさえ見えた。いま、ずいぶんと消沈したユウヒを隣にしているためにそう見えている。

前方の商人旅団キャラバンのなかから、年若い笑い声が響いてきた。おそらくは商人である父の跡を継ぐ少年のものだろう。ドランチス力の陽気は過酷かしくであるはずの商人の旅を、楽しい父子の旅行に変えている。対し、一向いっこうに楽しい旅にならないユウヒとレイネ。恨めしげに、そして羨ましやみじげに声の元を眺めていた。

戦にならぬ戦　『草原の議場』に派遣されたミール学園の学徒は、兵事学科へいじのユウヒたち幹部候補生五十数名と、魔法学科のレイネである。

ユウヒたちは明日のドランチス力を守る将兵の卵、たとえ矛を交えずとも、その雰囲気ゆうえきを味わうだけで充分有益な派兵と言える。実

際には、ユウヒ以外は味わう前にゴブリンどもに叩きのめされているが。

魔法学科のレイネは、自身の望んだ職種が従軍医であったため、今回の派兵に志願したのだった。そこに、「ユウヒが行くなら……」という少女らしい想いがあったかどうかは定かではないが、なんにせよユウヒの前線参入と同じくらいに人々を驚愕させた事例であった。

藍色の髪と黒目がちの瞳で、動物的な愛嬌があるレイネ。彼女の性格に愛嬌があるかどうかは人の好みであろう。魔法の技術も高く、学園では“ミームルの黒猫”と呼ばれる才女であった。だからこそ従軍医など……と彼女の能力を惜しむ者も多かったが、レイネはその声に心変わりしなかった。

魔法学科の学徒の一般的な進路は、魔法学研究者や宮廷学者、そして野良の知識人。俗に言う、冒険者だった。ユウヒの所属する兵事学科とは異なり、自らの将来にある程度の自由が利き、ただ肩書きが欲しいからと入学する者も多い。自由な気風が強く、奔放で利己的な人種が集まる学科と言えた。

とはいえ、レイネのように医者を目指す学徒もいる。医者に限らず、ミームル学園の教師となり、あるいは文盲率の高い地方で私塾を開き、ドラランチス力の発展を望む者も少なくない。

だが、従軍医となると話は違ってくる。戦場に出れば否応なく敵の矛先に晒され、いつ命を落としても不思議ではない職業だった。とても魔法学科の学徒が選ぶ職業とは信じられなかったのである。

彼女と親しい者がその意思を確認したとき、

「人の強さは、力だけじゃない。人を支える手も、強さの一つ」

遠回しで、しかし聞く者によっては直接的な回答であった。

かくしてレイネは『草原の議場』へと参戦、魔法による治療がどれほどの利潤を生み出したかは言わずもがな、であった。ゴブリン

に敗退した幹部候補生たちには気の毒だが、彼らがいたからこそレイネの魔法による治療が功を奏し、準備されていた薬品や医療機器が手をつけられずに済んでいる。

従来の医療部隊の他に知る者は少なく、いまはレイネの存在にありがたみを知る者も少ない状況ではあったが、兵士の質の底上げを画策しているユキア姫が、それに気づくのは後々のことになるだろう。

まずまずの成果に、めったに笑うことのない“ミーミルの黒猫”

はわずかに笑みを浮かべて満足していた。加えてユウヒ以外の幹部候補生の早期撤退、つまりミーミル学園への帰路はユウヒと二人きり 商人旅団キャラバンと同行しているのは学園規律上の問題。

その辺りは歳相応で、気恥ずかしくも、やはり嬉しさが勝っていたレイネであったのだが。

2

自分から話し出すまでは、理由を聞かずにいよう。

そうレイネは考えていたが、何十回と溜め息を聞かされるとさすがにうんざりして、声高こわだかに問い詰めたくなってくる。常日頃から冷静沈着、冷徹無比、理路整然とした物腰ものこしのレイネは努めて平静に尋ねることにした。

「議後、公妹殿下こつまいが召喚なされたそうね。……なにかあったの？」

「……停学処分」

「そう……、……うそ」

回文かいぶんになったレイネはユウヒの顔を凝視ぎょうしした。

兵事学科は魔法学科に比べてはるかに規律が多く、しかしながら

なにかと秩序を乱して停学を受ける者が多い。血の気をたぎらせる者が集まる学科である、仕方がないと諦めに似た風潮があり、警備兵は日がな一日、内側に目を光らせている始末である。気性の荒い兵事学科を、魔法学科の学徒は蔑視して「子犬どもが、今日も遠吠えか」と嘲笑する対象であった。

例外なく、レイネも兵事学科の学徒には良い印象を持っていない。多くの者が粗暴で、魔法学科の学徒に因縁をつけてくることが多々あったからだ。他ならぬ彼女も、“ミーミルの黒猫”と名指された人間である。目を付けられることは必然だったのだろう。彼女に不愉快な感情を呼び起こす対象となり、幾度となく身の危険を感じる場面に遭遇していた。

そんな折り、ユウヒがレイネの前に起った。掃除用具の剛毛箒片手に。

真剣を持った数人の学徒と激しい格闘。その果てに多少の切り傷を負いながらも勝利したが、当然、停学処分を受けた。

「正しいことをしても、暴力は暴力。処分は妥当」

“魔獣”らしからぬ、また自身を襲った兵事学科と同じ学徒とも思えぬ言葉に、レイネは軽い衝撃を受けていた。

その後、らしからぬ少年との交流を始めたレイネ。気づいたことは、“トローンの魔獣”という物騒な通り名のわりに力を誇示せず、それどころかできるだけ争いから身を遠ざける傾向があるということ。知識はないが知恵はあり、意外に勤勉で微妙に紳士な人と為りが、ユウヒという少年の人物象となった。少し持て余し気味になる感情はこの頃から始まったのだが、それはさておき。

ユウヒが停学になったのは、レイネを庇って戦った事件のみである。自ら事を起こして処分されるような人間ではなかった。

「陣中で粗相したの？」

「やめてくれよ、子供じゃあるまいし。……理由は知らない、いきなり殿下に『卒業は見合わせる』って言われた」
「……厳密には、停学じゃないわね。けど……」

停学と同じことであろう。卒業を見込まれていたユウヒは、兵事学科で取得できる単位はすべて取っている。しかも取る必要のない科目の単位まで取得しているものだから、学園内ではなにもするところがなく、ただ無為に過ごさなければならなかった。

なぜそんなことになったのか、おそらくユキア姫以外に知る者はいないだろう。とつとつと愚痴り始めたユウヒによれば、シナもゴーボリも驚いていたと言う。

ゴーボリはともかく、シナはドラランチスカ王家三代に仕えた忠臣、ささやかながら やや毒気も含ませつつ 次のように上訴してくれたらしい。

「畏れながら、殿下。学徒兵ユウヒは、礼を失することなく護衛の任を務め上げました。兵站警備では武技冴えわたり、魔物ども十数体を屠る猛者ぶり。また、学の不備を自覚し、勤勉なること、他の学徒に類を見ぬと思われます」

そもそもユキア姫自身がユウヒに護衛を依頼し、またその理由が兵站警備の戦果によるものであった。シナに言われるまでもなく、自身のしたことは気分次第で人の扱い方を変える、貴人の暴虐であることは幼い姫君も分かっていただろう。

苦言を呈されたユキア姫は、だが微塵も表情を変えず、「もう決まったこと」といつになく高飛車に返して馬首をも返し、ユウヒたちの前から立ち去っていった。

「なんなんだろうな、まったく……。なんていうか、おれ、馬鹿みたいだ」

襲いかかって来たゴブリンどもを風変わりな剣でなぎ倒し、シナに色々と教授されつつキーツシリック軍を遠望した。五十余年前のキーツシリック教会の残虐さに奮然とし、ドラランチスカ劣勢の戦局をひっくり返した“トローンの魔獣”の武勇に高揚した、それらすべてが馬鹿馬鹿しく感じてしまっていた。

なんのためにトローン山脈から出てミール学園に入学し、なんのためにドラランチスカの将兵になろうとしたのか……。

「……それ、ユウヒ。原点に聞いてみれば、もしかしたら」

溜め息が愚痴に変わっただけの、吐露され続けるユウヒのぼやきを殊勝に聞いていたレイネは、はっとして返した。

それはそのまま、“魔獣”が里に下りてきた理由であったからだ。

大人十人分に及ぶ城壁から望む緑野もまた、絶景であった。

トローン山脈と対を成す、北方の山脈カスタモの山影が霞みながらも窺える。あちらの向こう側、オローグ海と大帝国アヴェールはまだ厳寒な冬であるう、形に成りきらない雲がカスタモ山脈の上に登りつめ、波頭のように砕けつつ天空の青へと消えていた。

トローンもそうだが、カスタモがあるからこそアナントル半島は、ドラランチスカは一足早い春を満喫できるのだった。内陸部は地形上盆地になり寒さと降雪量が極端な面もあるが、冬を越えれば周囲の山々から川が流れ込み、肥沃で豊かな土地となる。

冬が明けきらぬうちから農耕者たちは動き始め、各々が持つ畑へと出向いていた。なにを栽培するかは決まっているが、国の方針で微妙に違ってくることもあるし、昨年耕作した土地は休ませたり、別の種類の作物を植えたりもする。

そうした計画のもと、実際に畑を見て微細の調整に入るらしい。

城壁から少し離れた農耕地で数人の男たちがなにやら話している姿があった。楽しげで、あまり仕事に絡んだ話をしているようには見えない。やがて方針が決まったのか、道なりに植えられた糸杉の間を歩き去っていく。次に来るときは、牛や馬、農機具を携えてのこたろう。

「いやー……、平和だ」

その光景を見ていた一人の青年が、大きく伸びをしながら声をあげた。青みを帯びた銀髪はところどころ跳ね上がり、碧眼を収めた目蓋はまだ眠そうに重い。寝起きの様子であったが、すでに太陽は中天に達している。

こういった人種は魔法使い、または見習い魔法使い　魔法学科の学徒であることが多い。例に漏れず、青年は魔法学科の生徒であった。

青年はいままで見ていた大平原に背を向け、胸壁に身を預けた。

自ずと目に入るトローン山脈のすそ野と、それに張り付くようにして成り立つミーミルの街並み。

二階建て、平屋建て、あるいは楼閣まである豪邸　様々な家々が、密集とは言えないまでも所狭しと立ち並んでいた。それらすべての家が赤い瓦屋根と白塗りの壁を用いている。

街路樹も多く見受けられ、造園樹として設けられた樹木も目立っていた。ミーミルは山際の扇状地に造られた都市、山に近付けば次第に家よりも木々の方が多くなってくる。

そして、原生林の群れる山中に建つミーミル学園。以前は軍事拠点であったミーミルは、いまでもその名残が残っており、学園というにはいささか度の過ぎた頑強な塀が敷地を囲んでいる。青年がいる城壁とは比べる対象にもならないが、乗り越えようとするにはそれなりの苦勞があるだろう。

敷地内の建物は、さすがに砦の風を拭い去っていた。だが、砦の

堅牢さの代わりに学び舎の厳格さが現れているかといえば、じつは
そうでもない。講堂といった主だった儀式を行う建物とはもかく、
それ以外 教室の棟や寄宿舎など は下界の家と同じよう
な質素な造りであった。

山中の赤と白のなかで、一際大きく真つ白な建造物が青年の目
とまる。いまだ目覚めきらない目蓋が少しずつ下りていき、ついに
閉じられて、青年自身までもがその場にへたり込んだ。

「……ああ、朝まで頑張ったのに、論文が終わらない……！」

どうやら切羽詰った状況を思い出して鬱屈してしまっただけらしい。

青年が目にしたのは図書館であり、彼の言葉の通り、朝まで白紙を
相手に筆記具で格闘を繰り返していた。

学園を名乗るだけあり、その図書館が収める書物の量は半端では
ない。通常、国立図書館が所有する書物は四万から五万。ミームル
学園の図書館が保有するのは、確認済みの部分だけで八万、いまだ
分別されない未読の書物を含めれば十万を下らなかつた。

青年は未知の魔法機器の開発を目指し、整理されない書庫へと出
向いて未確認の書物を漁りつつ、学園長に提出する議論書を作成し
ていた。しかし、内容にあった書物はなかなか見つからず、論文の
構成がまとまらない。独学で発見した調書を用いて論文の作成を試
みるも、既存の調書との食い違いが多く、やはりまとまるものでは
なかつた。

ゆえに、ふて腐れて仮眠、目覚めて城壁に上り現実逃避、しかし
変わらぬ実状。そんなところである。

へたり込んだまま唸り続ける青年の傍らに、そつと忍び寄る影が
一つ。

「あのー……、スメラ先輩？ 論文の提出は……！」

「はああ！ 学園長の手先め、哀れな学徒にさらなる苦難を持ちか

「けようというのか!」

「ええ!? いや、ぼくは魔法機器開発委員として、その……っ」

突然の奇声とやたら真に迫った科白を放つ青年　スメラに、

“学園長の手先”は怯えて後退った。

光の加減で青く見える黒髪と濃い緑色の瞳を揺らし、一見すると童女にも見える少年はなんとか言葉をつむぐが、もぐもぐと尻すばみになる。

「……冗談だよ、ミオ。完成には程遠いが、もうすぐできる」

「どっちなんですか……」

飄々と素に戻ったスメラ、口の端を上げて微笑する。彼の言葉の前者と後者、どちらに対する言葉か、少女のような少年　ミオは胸を撫で下ろしつつばやいた。

弄られる体質のミオは、スメラによく可愛がられる。さっきのように居丈高に接したり、よく分からない言い回しをされたり、混乱させられることがしばしばあったのだ。それを楽しんでいる風のスメラを前に、ミオの気が休まることはなく、引っ込み思案な性格に輪をかけておどおどとしてしまう。

「提出はすぐだ。一年くらい、あつという間さ」

「……もういいですよ、それは。それより……」

あどけなさを顔いっぱいに残した少年は、表情を改めてスメラを見返した。このときばかりは、ミオをからかってばかりの青年も真摯に事情を聞く。

「学園長ツブラ・ファンが呼んでいます。論文の提出はしなくても良い、ただちに我が下へ……だそうです」

「ふん……？ 一応、卒論なんだがな。提出しなくても卒業させてくれるのかな？」

真摯な顔つきが、少し違った感情を交えた。輝いたわけではなく、影が差したわけでもない。

言うなれば、人格が代わったような。

3

「あれ？ 殿下、なんでここに？」

「……っ、ユウヒ！」

帰還報告のために学園長の執務室を訪れたユウヒは、部屋の中央、長椅子ソファに座する人を見て驚いた。もっと驚いたのは、一緒に報告にきたレイネ。尊卑そんびの念が薄す過ぎる少年に、であるが。

ユウヒに停学処分を言い渡したときと変わらぬ様子で、微塵みじんも表情を動かさず、やや高飛車なまま背筋を伸ばしている。煌びやかな鎧は脱しており、姫君らしく白を基調とした礼装ドレスに身を包んでいるが、頑かたくな姿勢ははまだ心に鎧を着けている表れらしい。

「……私とツブラ・ファンは、これから大事な話をします。帰還報告は後日、改めて伺ってください」

“魔獣”の言動に気分を害した風ふうでもなく、片手を上げて二人の学徒兵を黙らせて、ユキア。

隣りの少女に倣ならって膝をついていたユウヒは小首かしを傾げた。もちろん、「大事な話」とは自分に関する事なのか、という疑問もある。

る。

それ以上に気になったのは、幼い姫君の視線の強さである。その瞳の奥に輝き見えるのは、微かな敵意、いや怯えであろうか。ともかく、“トローンの魔獣”と、なんのてらいもなく誉めて讃えた頃のユキアが嘘のようであった。

出て行け、と言われたユウヒだが、にじり寄りつつ公妹殿下の顔を見上げる。

「姫。姫、我はシナのような忠臣ではありませんが、奏聞をお許しください。そして何卒、我が愚問に依じて迷いをお払い下さいませ。なにゆえ我を遠ざけますか、忌避なさいますか？」

シナが諫言したあと、密かにユウヒはそう言うように指示されていた。古参の兵が曰く、「公妹殿下、なんか隠してやがる。あの人のこった、ちよいと母性本能をくすぐってやりやあ、洗いざらい話すと思うぜ。……俺の経験上な」とのことである。一体どんな経験であるのか、『母性本能をくすぐる』とは古老のよく知るスズカ女王の孫だからと言うことなのか、ユウヒには分からない。

ともかくにも、普段ユキア姫に謁見することなどできない赤髪の少年には実行しか残されていない訳だが。
急に畏まった口振りのユウヒに、レイネは少しの間だけ目を瞠って驚いていたが、すぐにシナの顔を思い出して得心顔になった。あらまはユウヒの愚痴から把握している“ミーミルの黒猫”、あの軽い毒を持つ老人が“魔獣”にさせようとしていることに気がついたのだ。

しかし得心顔もそこまで、続く表情はどこか浮かないものだった。理由はすでにユキア姫の反応が物語っている。

「う……っ、そんな目で……」

がらにもなく口ごもるユキア姫、組み合わせた自分の手を見てぶつぶつとなにごとか呟いていた。

ユウヒは『学の不備を自覚し、勤勉なること他の学徒に類を見ない』。それは当たっているが、間違いでもある。彼は確かに不勉強であるが、勉学に励む理由は、それではない。

ただ、好奇心旺盛なだけなのだ。『草原の議場』でのユウヒを見れば瞭然、知らない物事を目の当たりにすれば質問をくり返す。彼と交流を始めた頃のレイネも、魔法学科のことについて多くの疑問を投げかけられた。

さらに、こういった人種は得てして純真なものである。神秘的威厳とは違うが、生真面目なユウヒに問われた人間は、なぜか丁寧に答えてやらずにはいられなくなった。思い当たるふしのあるレイネは、彼の意識しない特技を快く思っていないかった。年頃の少女が持つ、特有の潔癖性とも言える。

果たして『母性』とやらを刺激されたらしいユキア姫は、仮面のようであった先刻までの表情を和らげ、しかし愁いを帯びた碧眼をユウヒに向けた。

「……緘口令が布かれています。そちらの学徒は退出を……」
「えっと、畏れながら、殿下。魔法科学徒レイネは、学科が違いながらも、我が師と呼べる存在でありますからに、まげてご寛恕を願います。師とあらば、我が行く末を気に掛けるものゆえに」

決して流暢とは言えぬ奏だった。しかもレイネの同席を願い出るなど、不敬罪に問われても不思議ではないことをユウヒは口にする。

気が気でないレイネだったが、心配する気持ちをユウヒが汲んでくれたからこそその願い出であろう、にわかには心臓が活気づいた。気づかれていた、ということにも気づいて動悸が一段と激しくなったが。

逡巡するそぶりを見せたユキアだが、レイネの名を呟いてなにかに思い至ったらしい。熟れた果実色の瞳から、緑を内包する黒い瞳へとユキアは見つめなおし、一つ頷いた。

「一を聞いて十を知る才媛、^{さいえん}“黒猫”レイネ。貴女もまた、“魔獣”と同じく改革者でしたね。……医療部隊での報告はまだ伺っていませんでしたが」

童女であることを忘れさせるような笑みを浮かべて、ユキア。

なぜかは分からないがレイネはぞつとして、下げた頭をより深く下げた。公妹殿下の言葉から察するに、異例の従軍医であることを知っており、それなりに目を掛けられていたと考えるべきところなのだろうが……。

「良いんですか？ で、緘口令の内容は」

レイネの同席を許されて安堵したユウヒは、勢い込んでユキア姫に詰め寄った。さすがにユキアも眉間にしわを寄せ、レイネはさすが肘を打ち込んだ。やはりどちらにも痛痒を感じなかった“魔獣”は、わずかな緊張を孕ませつつ、幼くも聡い姫君の言を待つ。

ややあって、公妹殿下は緘口令であることに強く念を押し、桜色の唇を開いて、キーツシリク帝国との会議の内容を話し始めた。

第二話 「黒猫たちの学び舎」 前編（後書き）

今度はいつ投稿するとは言いません（笑）
できるだけ早く投稿するようにします……

では。

第二話 「黒猫たちの学び舎」 後編（前書き）

長くて細かいです。休憩を挟んで読んで下さい。

ミームル学園の大きな半円形アーチの門をくぐり、初めに目にするのは広大な校庭である。

中央に巨大な水の精霊オンディーヌの石像が建ち、その周囲を水路が巡っており、時には噴水も上がる。石像を囲んでいた水路は学園内の至るところへと進んでいくが、往々に小橋こはしがかかり、歩き回るに不自由はない。水路と同様に学園中を走る道々、その路傍ろばうには整えられた低木ていぼくが茂り、それを越えれば刈り揃えられた柔らかい芝生しはいふが広がる。風致ふうぢ林りんなども多く植林されて、その木立の下で生徒たちは思い思いに憩いを楽しんでいることが多い。

水の精霊オンディーヌの石像を過ぎて、まず見えてくるのは教室の棟むね。白塗りの壁に赤い屋根と、下界の家々と変わりはないが、その規模きぼは段違いであった。

三階建て、そして奥行きがあった。正面の棟は教師たちの私室や教材保管庫があり、そこから右、左、中央と棟は奥へと伸びていく。向かって右が兵事学科の棟で、左は魔法学科の棟である。中央の棟は、兵事・魔法学科を問わず利用することのできる“課後活動”

愛好会など、学園が公認した生徒主導活動の拠点となる部屋

の棟。使用しているのは魔法学科の生徒がほとんどで、室内は魔法の研究により凄惨せいさんな状態だと言われている。

三つの棟の間には、必然的に二つの中庭が造られた。魔法学科の中庭は、校庭に似た雰囲気があり、厳肅げんじふさを伴わせて閑雅かんがであった。対し、兵事学科は無骨に土を剥き出させて、周囲に柵さくを設けた、さながら決闘場のような造りである。

この相反する中庭を見下ろすように、もはや壁と言っても過言で

はないくらいに高い最奥の棟、ツブラ・ファンの執務室があった。かりそめの部屋の主、ユキア姫から停学処分把事情を聞いたユウヒは、表面的には変化もなく、延々と続く階段を下りていく。

その少し先に行く藍色の少女は、なぜか赤髪の少年とは対照的だった。

「……レイネ、なんで怒ってるんだ？」

「キーツシリクの責任転嫁と、腰抜けドラランチスカ。この二つ以外になんがあるの」

「こっ、腰……」

レイネの辛辣な表現に、ユウヒは言葉を詰まらせた。辛辣と言うよりは無頼漢の言う決まり文句であろうか。なににせよ、普段の彼女からは考えられないほどに激昂しているらしい。

「キーツシリクはともかく、えっと、自分の国をそんな風に……」

「だったらなおさら」

一瞥いちへつすらくねず、レイネは階段を下りていった。

思わず足を止めていたユウヒは我に帰って、飛び降りるように階段を下りて“黒猫”に追いつく。レイネの小言を煙たく思っているのだが、いまは別の理由で彼女の隣を歩くことができず、やや後ろを歩いた。なぜか知らないが、怒りの矛先がこちらに向きそうだと感じている。

「……ユウヒは、なんで怒らないの。当事者じゃない、悔しくないの？」

「いや、悔しいことは悔しいけど……」

“魔獣”の予感は的中、黒曜石の輝きに似た瞳は冷たく輝いた。

慎重に言葉を選んでいたユウヒは、立ち止まって振り返ったレイネに視線で射抜かれて絶句する。

適当な言い逃れは許さない、そうレイネの表情が物語っていた。

「理解、できるんだ。いや、納得はできないぞ？ でも、殿下のなされたことは正しい、そう思うんだ」

ユウヒは“トローンの魔獣”と称されながらも、力を誇示せず、無駄な争いから身を遠ざける。野望もなく、ただ誠実に文武に精進する姿勢は、兵事学科のほとんどの学徒が見習うべき点である。また、ユキアの下した判断を了とした理性と知恵、そして潔さ。臨機応変に兵士を動かす指揮官としての素質が備わっていることを示している。

「……甲斐性なし」

だが、“黒猫”の瞳に感心したような色は出なかった。

彼女も感づいている。ユウヒは武技に非凡な才を持ち、勉学にも多大な興味を持ち、いずれは大部隊を指揮するような一角の人物になるであろうことは。

「か、甲斐……っ！？ れ、レイネだって理解できることだろう？ そんな……」

「もちろん理解はできる。でも納得しない。ユウヒ、納得できないって言ったけど本当に？ わたしには、ただ間違えないようにしているだけに見えるわ」

ふと、レイネのつり上がっていた眉が普段どおりに戻り、深緑の瞳に宿っていた冷たさも消えていった。かわりに、またやってしまった、という苦渋に満ちた面持ちになる。「腰抜けドラランチスカ」

と言い放ったところを見れば瞭然^{りょうぜん}、彼女は頭に血が昇ると言葉を選ばなくなるらしい。

ユウヒの考えが賢明であることは、万人の目に明らかであろう。否定する理由など微塵^{みじん}も無かったはずだった。それでも言わずにいられなかったのは、彼の逆境を心配するあまりの発言だったのかもしれない。

一度落とした視線をおそろおそろ上げてみると、赤髪の少年は困った顔であちらこちらを見回している。

……素直なのもここまで来ると、優柔不断よね。

なにか考えているようだったが、決して言い返す言葉を選んでいくわけではない。レイネに言われたことを吟味しているのである。ただたどしくユキアに奏上したときに彼は言っている、レイネは我が師と。ゆえに、しおらしい彼が言い返すことなどない。されたこともなかった。

胸奥で毒づいてみたレイネだったが、しっかりと言葉を受け止めてくれたユウヒに嫌気は差さない。やはりこれも、特有の独占欲というものなのだろう。

「……言ったでしょ？ 原点に聞いてみれば、って」

一向に思考の迷路から抜け出ることのできないユウヒに、帰途に語っていた言葉を繰るレイネ。ユキア姫から一通りの事情は聞いた。それで進退窮^{きわ}まったとすれば、聞く必要のない呟きである。

そうではないユウヒは我に帰って目を睨り、「そうだったな」と苦笑へと続けた。

「じゃあ、スメラを探すか」

「ご機嫌麗しゅう、ツブラ・ファン」
「麗しゅうないわ、この白痴の狼め」

恭しく礼を施した銀髪の青年に、巴旦杏のような目の、さながら猫の印象を抱かせる老婆が言い放った。手にした大きすぎる杖で石畳を小刻みに突き、いささか焦燥感が見える。

苦虫を噛み潰したような口調、そして言葉ではあるが、スメラに堪えた様子はない。

「事情は伺っておりますませんが、まあ、だいたいの察しはつきます」
「ならばどうするのだ。あの赤熊の小僧、キーツシリクの大義名分になろうが」

「ふむ、一昔であれば、そうなり得たでしょうが」
「……違つと申すのか？」

額に指を当てて熟考するかのような姿勢だったスメラはやにわに顔を上げ、わずかに戸惑ったミーミル学園の長ツブラ・ファンに笑顔を向ける。声には出さないが、それは肯定の意を表していた。

ツブラ・ファンの背後にいる数人の人影に目をやったスメラ、老婆の背後には世話係の侍女や警護の兵がいる。

意を汲んだ学園長は人払いを命じて周辺から人を遠ざけた。

「……ご心配なさらずとも、想い人は、剣ではなく花束を抱えて参上しましょう」

「クソがつくほどのババアに色恋なんぞありやせんわ、狐狼めが。」

……馬を呼んで蹴飛ばすぞ」

「や、これはしたり。愚昧なる私めは、彼の“翡翠の竜騎士”殿との確執が深まることを恐れてかと……」

「さすがだけの杖かと思いきや、ツブラ・ファンは手首を反してやや磨り減った先端をスメラの顎下に突きつける。老婆の目に尋常ではない光が宿り、銀髪を射ぬかんとするほどに睨めつけていた。」

「おぬしには大事なことを教え忘れていたようだ、白痴の狐狼よ。」

……過去を知らば、口を閉させ。未来を感じれば、黙して進め。現在を覚らば、流れ流れよ。それが他人事ならば、なおさらな」

「白痴であればこそ、備えに抜かりがないだけですよ、ツブラ・ファン」

杖を突きつけられてなお、スメラは顔色一つ変えずに応じた。

ツブラ・ファンは背中走る悪寒を感じながらも、杖を引き、青年の言葉の意味を無言で問い掛ける。

「たいして苦しくもなかったはずだが、スメラは大げさに息をつき、ミームル学園指定の黒い制服の襟首を緩めた。ややあつて碧眼を収めた目が半分閉じられて、簡易の長椅子に腰掛けた老婆を見下した。」

「……すべて利用するのが、私の流儀。そこに善悪など関係ありません」

「つ、と眺めやった先に、“トローンの魔獣”と“ミームルの黒猫”が並んで歩いていた。」

「我が祖国の繁栄を築くためですから」

ユウヒとレイネが魔法学科の中庭に出たとき、さっと人影が割り込んできた。黒い頭髪に黒い瞳の少女、ではなく少年のミオだった。

「ユウヒ、レイネさん。いまスメラ先輩はツブラ・ファンと話していますので……」

申し訳なさそうにちょこんと頭を下げたミオに、ユウヒは突然、その黒い髪を撫でて乱した。

「うわわっ！　ちよっ、ユウヒ!?!」

「あ、悪い。……スメラの気持ちがわかるなあ」

ミオの体質は、ユウヒでさえ例外ではないらしい。悪いと言いつつ、少女のような少年の頭を撫で回し続けるユウヒの手は容赦がなかった。

見かねたレイネが“魔獣”の腕を引つ張って止めさせる。

「どうしてユウヒもスメラ先輩も、ミオをいじめるの」

「いじめる、じゃなくて、いじりたくなるんだよ」

「表現が下品」と言おうとしたレイネだったが、所詮ユウヒである。首を傾げられるに決まっている、と彼を無視してミオを気遣い始めた。

「大丈夫?」

「あ、はい。……慣れてしまいました、レイネさん」

とても哀愁を誘う言葉である。にも関わらず笑ってしまいそうになったレイネはなんとか微笑みで止め、意味もなくユウヒを睨みつけた。

思わず怯んだユウヒだったが、ふつと視線をずらすと表情を戻す。青銀の青年スメラに手を引かれて老猫　　白髪の老婆ツブラ・ファンが近付いてきていた。

「おうおう、“ミーミルの黒猫”レイネや。くだらぬ戦などに出て、正直飽き飽きだったろう？　命を粗末にする輩の従軍医などやめて、はよう我の後釜に納まれい。それでこそドラランチスカもミーミルも安泰と言つもんさね」

ただ聞くだけでも悪意がありありとわかる口調であった。向けられるべき相手のいない皮肉が混在していて、もしその者が聞いたとなれば、にわか反論もできなかっただろう。

直接的ではないがユウヒやスメラはその対象である。しかし、ユウヒは悪意を　　仮に気付いたとしても　　突き返すような人柄ではなく、スメラは軽く流してしまう性格だった。よってツブラ・ファンの言葉は、レイネに向けられた哀願、もとい愚痴にしかならなかった。

「軽々しく後継者を定めないで下さい、ツブラ・ファン。それに、“黒猫”は個人の名称ではありません。ミーミル学園、魔法学科の学徒すべての称号です」

「ふつ、ふふふあ、ゆえに己が代表格として“黒猫”の名を冠しておるのだろうか？　黒猫の王、ではないな、黒猫の女王よ。おとなしく我が意に添え」

哀願や愚痴と言えるのか定かではなくなってきた口調のツブラ・ファン。

いわゆる誉め殺しとはこのことを言うのだろうかとユウヒは考えたものだが、口に出してはなにも言わなかった。と、なにかに気づいた赤毛の少年は、レイネと話し続ける年老いた猫のような老婆に果敢にも　　あるいは無謀にも　　話し掛けた。

「あ、つと、学園長。兵事学科、ミーミル旗下学徒兵ユウヒ、草原の議場より帰還しました」

「……見りゃあ分かるわ、赤熊の小僧。ぬしや、空気読まんか」

「……魔法学科、準従軍医学徒兵レイネ、草原の議場より帰還しました」

「おぬしもかい、レイネ」

ユウヒには辛辣に返すものの、レイネには辟易といった風にツブラ・ファンは溜め息を吐いた。どうやら彼女の堅苦しさは、学園長その人さえも億劫にさせる力があるらしい。

俺だけじゃないんだな、と場違いな感想を胸奥に浮かべたユウヒは、表情にも場違いな笑みを浮かべた。

「……なにが可笑しい？　赤熊の小僧」

「や、なんでもないです」

意外にも、ユウヒは横柄であるのかもしれない。

6

聞こえよがしに舌打ちをしたツブラ・ファンはしわの寄った首を伸ばして、高みにある自分の執務室を見上げた。つられて見上げたユウヒは、その部屋の窓辺にユキア姫が佇たたずんでいるのを見る。

「赤熊の小僧、あの小娘に聞いたな？」

「こむ……？ ああ、内親王殿下。聞いたって、キーツシリむっ」

「ユウヒっ！」

緘^{かんこうれい}口令を布いた、と言われていることをすっかり失念しているらしいユウヒをレイネが押し止めた。文字通り、手で口を塞ぐ形で。

とっさの行動に思わず顔を赤らめた藍色の少女。口を塞いだだけだが、その辺りを理解できる者とそうでない者がいる。は手を引つ込めると、代わりに棘のある視線をユウヒへと送った。

ほとんど殴られたようなものであるユウヒは、思わず涙ぐんだ目を白黒させている。スメラはだれに憚^{はばか}るでもなく笑声を上げ、ミオさえも口元を押さえて肩を震わせていた。

「……赤熊の小僧と絡むと、レイネも変貌するの。とりあえず、漫才はそれぐらいにしてだな」

聞き捨てならないらしいレイネは、さらに紅潮した顔で食ってかろうとツブラ・ファンに向き直る。

しかし手で制されて、しかも冷徹な表情を向けられ、普段の彼女らしく居住まいを正して耳を傾けた。

「緘口令など、名ばかりよ。事実、我に筒抜けだ。それにこの狐狼にもな」

「あ、でしたら僕は……」

「いや、ミオにも聞いておいて欲しいかな。正確には君の財力が目当てだけだね」

緘口令と聞いて身を引こうとしていた黒髪の少年、だが笑みを浮かべた“白痴の狐狼”が止めた。銀髪の青年の言動に少なからず嫌

味を感じたミオは、珍しく険しい顔をする。

ミオは口を開き、だが言葉が吐き出される前にツブラ・ファンの杖が唸りをあげた。

「おっと、危険」

「こんの大ボケ男狐めが。口が達者なのと悪いのは違つぞ」

避けられて体勢を崩したツブラ・ファンはレイネに支えられて、それでもいささかも劣らぬ語気の荒さでスメラを叱責した。姿勢こそ威厳はないが、老婆の目には真摯な怒りが見える。レイネと同じく、ミオも優秀な魔法学科の学徒。ツブラ・ファンにとって可愛い学徒である様子であった。ユウヒやスメラに比べて、彼らにひいきを感じるころではあるが、大切に想っていることは間違いない。

ツブラ・ファンの好悪は別として、スメラは自らの言葉に棘が含まれていたことに気付いて両者に頭を下げた。

「失礼しました。……ミオ、悪かった」

「あ、いや、はい。……でも、本当に僕が聞いても良いんですか？」

「ああ。君たちの魔法機器開発委員会にも頼らなくてはならない、かも知れないからね。……時代の趨勢すうせいによっては、君の父君にも援助を願い出ることもなるだろう」

この言葉は、なんのてらいもなかった。少なくともユウヒにはそう聞こえて、ある予想が立てられ始めた。

「……戦やるんだな、キーツシリクと」

彼自身は気付いていなかったのだろう、普段よりも声音が低く、聞いた者に戦慄せんりつを走らせるような響きが含まれていることに。

確かにユウヒは“魔獣”であるようだった。赤髪の少年の呟きを

聞いて、レイネとミオは目を見開き恐々とした表情を見せている。スメラさえ、その笑顔に若干のひきつりが見えた。それは獣の雄叫びを耳にしたときと似た感覚であった。

ツブラ・ファンは「けっ」と口の端をわずかに開いて鋭く息を吐く。

「気張るのはいいが、小僧、まだ戦うと決まったわけではないぞ。それに、いずれにしても学徒兵の出る幕などありません。……我が許さん」

老婆は一瞬、視線をユウヒから外して横を見る。白い顔の三方を藍色の髪に包んだ少女の表情を目に収めていた。戦あついた感情はすでに消え、代わりに。

「……スメラよ、ぬしがどんな姦計を用いようと知ったことではない。だが“トローンの魔獣”の起用は、学徒の派兵は認めんからな。小娘になにを言わせても無駄だぞ」

始めは呆あっけ気にとられたようなスメラだったが、まくしたてるツブラ・ファンを見つめ、次第に笑みが刻まれていく。“白痴の狐狼”はそこはかとなく事情を察し、ユウヒに浮かんだ笑みを向けた。

「ふむ、派兵は認めぬと学園長は申されますか。“トローンの魔獣”ユウヒ、どうしたものかな？」

「え？ あー……」

さっきの迫力はどこへ行ってしまったのか、ユウヒは歳相応の顔つきで考え始める。

学徒としては学園長であるツブラ・ファンに従うべきだろう。しかしドラランチスカ国民としては王家、というよりユキアに従うのが

道理。どちらにしてもユウヒはキーツシリクの前に立つことを許されていないが……。

“トローンの魔獣”とスメラは言っている。

つまりは、ユウヒ個人はどうしたいのかと聞いているのである。そこまで考えが及ぶまでにさして時間はかからなかったものの、いざ自らの意志はどこに向かっているのかと聞かれれば、さらに時間を要する問題であった。

が、早い段階で答えは出た。いや、スメラが示唆していた。

「……ああ。戻ればいいんだ、“トローンの魔獣”に」

「な……っ！」

悲鳴に似た言葉の切れ端を漏らしたのはレイネである。ツブラ・ファンはこの上なく苦々しい顔をして、この上ない怒りの視線をスメラに向けた。ミオにもユウヒの言葉がなにを意味するか理解したようで、猫たちと狐狼と魔獣の間でおろおろとしている。

「……冗談だよ、ユウヒ。ひとまず、ツブラ・ファンの言に従うとしようか」

「あ？ うん、そうか」

なにも分かっているなさそうなユウヒの背中を軽く叩いて、スメラは他意なく笑う。演技であることなど露知らず、赤髪の少年は押されるがままに中庭を出て行くことになった。

視線を彷徨ウロウロわせつつユウヒを伺うレイネ。まだ戸惑い気味のミオ。なにか言いたそうにしているユウヒ。

スメラはなにかと理由を付けてレイネとミオをも閑雅な中庭から去らせた。

と、背中に衝撃を受ける。ツブラ・ファンの大杖の先端らしいことだけは分かった。

「どういつつもりだ、狐狼……！」
「つつ……、こちらの科白ですよ、ツブラ・ファン」

しかめた顔にも笑みを作る銀髪の青年に、老婆は大杖を振り上げる。

振り下ろされた大杖は、だが石畳に跳ね返った。避けたそれをスメラは強引に奪い取り、ふと高みにある学園長の部屋を見上げる。ぼつりと佇む人影と目が合った。

「……あえて身分を持ち出させますか？」

「いかな貴人であろうと、我は屈せぬぞ……！」

このとき、スメラの瞳に色が出た。感情とは違う、意志の表れ。老婆に呼び出されたときにミオに見せた、人格が代わったような表情。

「……レイネを想う気持ちは分からぬではないが、いささか度が過ぎる。稀代の魔女も寄る年波には勝てぬか？ 情にほだされて見境をなくすのか？」

「……！」

途端に変化したのは言葉使いだけではなかった。眼光、とでも言えばいいのだろうか、威厳ある老婆をすくませるほどに強い視線をスメラは放つ。

にわかに言葉も発せぬツブラ・ファンは自らを叱咤し、どうにも抗えない空気を一掃しようとする。思わず魔法を発動しそうになる自分を抑えて、なんとか目の前の青年を論破しようと脳内を回転させた。

だが浮かんでくる言葉はすべて、先刻のスメラの問いに対する弁

解。

「此度は控えていたどころ、元“ミーミルの黒猫”。貴女はいるだけだよ、我々のすることに口を差し挟むな」

冷徹に、ユウヒたちと一緒にいたときは想像もつかぬほどに冷徹に、“白痴の狐狼”は語る。

「すべての権限は、ドランチスカ国王ラオニー三世……この私にあるのだから」

第三話「魔都の狐、魔窟の狼」前編に続く

第二話 「黒猫たちの学び舎」 後編（後書き）

ではまた。

第三話 「魔都の狐、魔窟の狼」 前編（前書き）

無駄に長くて、細かいです。休憩を挟んで読んで下さい。

第三話 「魔都の狐、魔窟の狼」 前編

1

南のトローン山脈、北のカスタモ山脈の間に広がる、トウーズ高原。

中央にデルディール湖の水面が輝き、それを背にして王都ウィグリムは在る。学園都市ミーミルや“華やかなるスタンブレ”など名だたる都市が点在するドラランチスカの中心地ではあるが、慎ましさを旨とした造りの街で人氣が少なく、だが荘厳な雰囲気纏っていた。

国王ラオニーやユキア内親王らが住み暮らす王宮はデルディールの湖上に建っている。豪華絢爛というわけではないが、質素に過ぎるといってもなく、まして砦を意識したような堅牢の城でもない。それでも、ドラランチスカを訪れる旅人たちは湖上の城を眺めるたびに感嘆の溜め息を残していく。

白を基調とした王宮は、足元のデルディールが放つ光の乱反射によつて、えもいわれぬ光彩に染め上げられた。高名な彫刻師や、名高い絵師が創る壁画などが勝ろうはずもない、自然の織り成す技が生かされていたのだ。当然、その日の天気次第という制限はあるものの、湖上に建つ城はそれだけで輝いて見えた。

王宮の建設を手掛けた者の名は知られていないが、

「人の手によるものは、自然を織り込んで初めて美しくなる」

との言葉だけは残っている。

名もなき偉大な古人の言に従い、ウィグリムは原初の景観をなるべく害さぬようにと発展を続けていた。城下街の住人たちはもとよ

り、王族や貴族とて例外ではなく、隠遁いんとんするための離宮りきゆう造りも自然に配慮はいりよして行われている。

余談ではあるが、ウィグリムは莊嚴そつげんであるというよりも、遺物めいた静けさだと揶揄やゆする者もいるらしい。

国王ラオニーやユキア姫の祖母である昔日せきじつの女王スズカも、いまはデルデール湖のほとりに建つ平屋の離宮で余生よせいを過ごしていた。

「御前に失礼致します、スズカ様」

「……シナ？ 珍しいですね、あなたがここに顔を出すなんて」

揺り椅子に腰掛けてデルデールの湖面を眺めていたスズカは、少しだけ驚きの表情をつくり、続いて穏やかに目を細めた。

若かりし頃は“ドラランチスカの鳥獸王グリフォン”と呼ばれるほどに血気盛んな姫君であったが、女王に君臨して以来、その烈はげしさはなりを潜められている。為政者いせいしやとしての意識がそうさせたのだろう、現在は柔らかな貴婦人の体ていであった。

シナは、ユウヒなどには見せぬ紳士の風ふうを装って彼女の前に立っている。その身に鎧よろいを纏まとわず、絹の礼服に包まれているのも理由であるのかもしれない。

「本当に久しぶり……、今までなにをしていたのです？」

「老骨のすることなど、たかが知れましょう。若い者を諭さとし、ときに惑わせ、そして右往左往する姿を眺めて意地悪く笑っております」

膝もつかずに、口の端に微かな笑みをのせて、シナ。

「無礼」との声もなく、スズカもただ微笑みを表情に刻ませた。

「相変わらずですね。……それでも、それがうらやましい、気もし

ます」

「ならば余計な老婆心を起こせばよいだけの話。……や、これは出過ぎた物言いでございます」

飄々とする白髪ひらひらの老兵に、少しだけ羨望せんぼうを滲ませたスズカ。続けてシナは口を憚はばることなく雑言ざつごんを吐く。

やや白髪しろかみの混じった頭髪かみの老婦人はにわかにわかに表情を変え、少女であつた頃のようにいじけて見せた。

「そんなこと、思っていないくせに」

五十余年前。まだ“グリフォン”であつた頃の彼女は、同じ年頃の側仕そばつかえであつたシナ少年に甘えていた。甘えるとは、猫撫ねこなでで声を出して寄り添うような、そんなものではない。

ことあるごとにシナに叱咤しかたの雷かみなりを落とし、あるいは拳をも落とし、ときに好奇心という名の暴風に巻き込み、あるいは回し蹴りにも巻き込んだ。それが許される相手がいる、だからやる。それもまた甘えと言えよう。

その頃の心的外傷トトラウマが蘇よみがえってきたのか、毒舌であるはずの老人は身構みかまえる。

「や、その、あー……。そう、スズカ様に目通りしましたのは、ご令孫れいそんの方々かたがたに関するでございます」

ユウヒがいまの彼を見たならば、思わず目を丸くしてしまうだろう。どんな貴人が相手だろうと鈍ることがないシナの毒舌が、振るわれることも含まれることもなく、ひたすら弁明べんめいめいた口調で話すのだから。五十余年前の古傷ふるきずはよほど深いらしい。

「あの二人がなにか？ ラオニーはともかく、……ユキアは私に勝

らぬとも劣らぬ働きでしょう？ それとも外交官として居丈高だといつのですか？」

穏やかに、しかしどこか意地悪く笑んでいたスズカは、令孫ラオニーやユキアのことを仄めかされて表情を改めた。言い回しこそ詰問のようであるが、口調は至って優しげである。

その言葉を聞いたシナは、思わず呆気にとられ、そして笑わずにはいられなかった。とくに最後の言葉 「居丈高な」幼い姫君の姿が易々と思い出すことができたからだ。ともない、その姿は“ドランチスカの鳥獣王”の少女の姿が重なった。

彼女は言っている、「わたしに勝らぬとも劣らぬ」と。

「くくく……、……あいや、失礼しました。たしかに、どこぞの姫君よりか、あのお二方は御しやすい為政者でありますな」

「……さすがに怒りますよ？」

もはや不敬罪の話ではないほどに無礼な発言をしたシナ 心ト的外傷は簡単に引っ込んだらしく へ、気分を害した様子のスズカは刺々しい視線を投げやる。

高貴な身分ゆえの怒りではないことを知っている老兵は、型通りに、しかし誠意があるのか分からない謝罪をして難を逃れた。

「重ね重ね失礼致しました。で、本題ですが……」

いつもの調子を取り戻したらしく、シナは先刻のスズカのように表情を改める。全体的には笑っているが、目には真剣味を漂わせた。やはり怒りは演技であつたらしいスズカ、肅然とした面持ちへと変えて居住いを正す。

「伺いましょう？ 戦友シナ。願わくは、かくあらまほしきことを」

「さて……」

相談事に、望ましいものもないだろうに。そうシナは言いたかったが、言いたくなる彼女の気持ちも理解できた。ある程度、孫たちの動向は耳にしているのだろう。

国王ラオニーは微行びこうをくり返し、国政を放り出している。公妹ユキアは「政治に参与して兄を支える」と公言したものの、実際は権力を専らせんぱにしている状態である。

この二つの話は、市井しせいや一部の官吏かんにりの間から聞こえてきたものであった。なにやら不穏な響きが含まれているものの、そのような愚鈍な、そして支配欲しはいよくに塗れる孫ではないことをスズ力は知っている。鼻先で笑い飛ばせるよたでしかなかった。

……だが、年老いた“グリフォン”は、妙な胸騒ぎを抑えられないでいる。二人の年若い孫たちはなにを成そうとしているのか、そこまでは知り得なかったのだ。

……少々、危なっかしいあんよであります。

単刀直入にそう言おうとしたシナだったが、さすがに憚はばれて、ただ胸中で呟つぶきに止まった。

さてどう切り出したものか。シナは、皮肉しか浮かばない頭ひねを捻り始めるのだった。

2

まだ日は高いが、学園は課後活動かじかじどうの時間帯になっていた。季節は

春、進級や卒業が危ぶまれている者たち以外は、授業も少ない。

校庭には多くの学徒たちが思い思いの場所に集まり、楽しげに大声を上げながら会話に花を咲かせ、あるいは商人のように密談めいて話し込む姿があった。水路にかかる小橋に腰を降ろして流れる水面と戯れる者や、低木の向こうの風致林に癒しを求めて寝転がる者、それぞれの憩いを学徒たちは楽しんでいた。

水の精霊像の前に、憩う学徒たちとは雰囲気の違う三人がいる。

一人はぼんやりと教室の棟を眺める赤毛の少年、一人はその少年を無然とした表情で見つめる藍色の少女。もう一人は、その二人に挟まれて居心地が悪そうにしている少女のような少年。

「あー……、スメラとなんの話もできなかったなあ」

「ツブラ・ファンのお叱りは短いんだから、すぐに来るわよ」

「その分、並の人なら三日は立ち直れないくらい辛辣に叱りますけどね、学園長は」

「スメラ先輩は、“並みの人”じゃないと思うけど」

藍色の少女　　レイネは、銀髪 of 青年の笑顔を思い出してぽつりと呟いた。

少年のような少女・ミオとは違った意味で、中性的な顔つきのスメラは多くの異性に好意を持たれていた。レイネは「多くの異性」に含まれない性格のようで、スメラに対してこれといった特別な感情は湧かない。というよりも、目の前でぼんやりしている少年一人で精一杯である。

彼女は、だがスメラにまったく好意がないわけではなく、同じ学び舎の人間としての友愛はある。ミオと同じく、魔法機器の開発に取り組む姿は、正直つたなさがあっても実直さがあつた。

その真面目さをレイネは評価するが、それ以外は評価できなかった。悪い意味をもってしての「できない」ではない。

捉えどころがない、その一言に尽きた。飄々とした性格はともか

く、話し方、表情、仕草、すべてがまがい物に見えて、ときおり友愛さえ忌避したくなった。生真面目であると周囲から言われているレイネは、自分の堅苦しさがスメラを得体の知れない人間だと思わせているのかもしれない、と、やはり生真面目に考えていたのだが。

「……ユウヒ。スメラ先輩は、どうしてユウヒに退学を勧めたのか分かってる？」

「うん？ そりゃあ……、ミーミル旗下は、俺が戦える環境じゃない。ってことを言いたかったんだろ？ と思うんだけど」

レイネが妙に不機嫌になっていることを察した赤髪の少年ユウヒは、言葉を吟味するように選びつつ答える。彼が曰く、師匠であるらしいレイネは、じっと見つめるだけでなんの反応もなく、ユウヒを挙動不審にさせた。返答がないことに、ひどく不安を感じているようである。

彼の言葉が正解か否かを知るのは、他でもないスメラであり、レイネは返答の言葉を持たない。それは分かっていることだが、あえて尋ねておきたかった。彼女が確かめたかったのは、ユウヒの意志であった。

しかし確かめるまでもないことは、中庭でのユウヒの発言を聞けば分かる。

『戦^やるんだな、キーツシリクと』

戦慄して、次いで生まれた感情にレイネは気付いていなかった。その後、“魔獣”と“狐狼”へ向けられたツブラ・ファンの言葉に期待感が満ちていったことだけは覚えている。

だがそれも、ユウヒの「“魔獣”に戻る」との一言にひどくまごついてしまった。

……なぜ、簡単に退学することを決意できるのか。これまで勉強に励んできた学び舎を捨て、決して深いとは言えないまでも、勉強その他諸々の付き合いがある自分たちを捨ててまで。

戦うことがそんなに重要なのか。もともと戦闘要員としてユウヒはトローン山脈から降りてきたことは知っている、だが、それ以上に大切なものは見つからなかったのか……。

「結局、スメラ先輩の言いなりってこと……?」

「ん? なんて言ったんだ?」

小さな呟きはだれに聞かせるものでもなく、ゆえに聞き返されてもレイネは答えなかった。

確かめたかったユウヒの意志とは、戦うことそのものではなく、彼を支えようとする自分を顧みないのか、ということ。転ずれば、「自分がユウヒにないを望んでいるか」。漠然とした思いが、いざ言葉になるとレイネは自身に嫌気が差してきた。

だが……。

「スメラ先輩は、ユウヒにないをさせたいの?」

「なについて……、腕のいい兵士になれるからって誘われたんだから……」

そうではない。気付かせたいなら、質問で導くのではなく、初めから答えを示せばいい。

そう思い至ったものの、さしも“黒猫”を称されたレイネも少女、感情を優先させることに恐怖があった。

ミオの存在を半ば忘れ、ユウヒの赤褐色の瞳を見つめながら、レイネは高鳴る鼓動を抑えようと静かに恐怖と戦っていた。

「ああ、みんな。やっぱりここだったか」

レイネにのみ折おじも悪く、スメラはのうのうと姿を現した。

彼を今ひとつ信用できない理由の一つが、「間の悪さ」から来ていることにも気が付いたレイネ。ただでさえ冷たい印象の黒い双眸が、完全な三白眼となつて銀髪ぎんぱつの青年を射抜いた。

「……ユウヒ、お前、なにかやらかしたのか？」

「お、俺のせいじゃない……と思う」

「……二人のせいだと思いますけど」

正確には言えないまでも、レイネの心情を汲み取っているのはミオだけの様子であった。彼の声は小さくユウヒとスメラには届かなかったが、静かに睨にらんでいたレイネには拾えたようで少し驚いた顔がミオに向けられる。

「ツブラ・ファンではないですけど、本当にレイネさんは変貌しますね」

自分は才媛などと呼ばれているが、実はからかわれて名付けられたのではないか。そんなことを考えて、レイネは赤くなつた顔を背けた。まさかミオにまで見抜かれるとは思わなかつたらしい。

「……スメラ先輩は、ユウヒを大舞台に上げようとしているだけです。目論みは多々あるでしょうけど、一番の理由は、優秀な人材を放つては置けないから、でしょうね」

ミオの声は控えめで、やや聞き取りにくい。引つ込み思案な彼には珍しくないことだが、このとき、レイネは妙な引つ掛かりを覚えた。

その言葉は、まるでスメラの意を得ているようなものだったからだ。いつもスメラとミオは一緒に行動しており、彼らの間には他の者が立ちいれぬものが築かれているのだと予想はつく。

だが、それにしても。赤味の引いた顔を再び向けたレイネは、漆黒の大きな瞳を見つめた。

「その優秀なユウヒが、レイネさんを泣かせるようなことはしないと、僕は思いますよ？」

そちらに水を向けられて、またレイネは初々しい果実色へと変化してしまつたのであった。

3

「あれ？ また殿つがう！？」
「いい加減にしなさい！」

何度目になるのだろうか、ユウヒの無礼な言葉にレイネはついに手を出した。強したたかに後頭部を殴りつけた彼女は、痛がるユウヒの頭を押さえつける。

度重なる“魔獣”と“黒猫”のやりとりに、やはりユキア姫は表面上に変化を表さなかつた。先刻、ツブラ・ファンの執務室では無表情であつたが、いまは微笑を浮かべて眺めている。

「構いません、“ミームルの黒猫”レイネ。“トローンの魔獣”ユ

ウヒほどに、とは言いませんが、楽にしてください。私がここに在るのは、微行ちゆうぎんに近いものがありますし……」

そう言った後、内親王殿下は首を巡らせて室内を見回した。

乱雑に積み上げられた書籍しゆせきの山、散らばる実験器具やその材料。煤すすけた壁に、くもの巣が張った天井。唯一、ユキアの座る長椅子ソファだけは新調されたばかりのように清潔感がある。

「……俺の寢床なのに」

スメラが聞こえよがしに呟いたが、王女には届かなかったらしく、彼女は物珍しげに、そして辟易へきえきしたように部屋中を眺めやっている。ツブラ・ファンの執務室も、正直なところ整理整頓されていたと言い難かった。

この部屋は、教室棟の真ん中の棟むね、“課後活動”で使用される施設である。利用者のほとんどが魔法学科の学徒で、どの部屋も似たような有様だが、この場所はまだましだとスメラやミオ、レイネでさえも言っている。

「アンタリエの銀鯨ぎんけい”ミオの部屋といっても、やはり魔法使いの部屋ですね。これなら、レイネの部屋の方が良かったかもしれません」

「あたし……、わたしは課後活動用の部屋は持っておりません、あしからず」

丁寧に返したレイネの後ろで、ユウヒがミオに驚いた顔を見せていた。

「ミオも通り名を持つてたのか？」

「勝手に付けられたんだ、父上にね。その方が見栄えが良いとかな

んとか言われて。名前負けしてるって言ったんだけど、聞いてもらえなかった」

トローン山脈以南にある、広大な港の都アンタリエ。海上交易の要所、「白帆はくはんの森のもり」の別名を持つ商都である。

絶えず商船しょうせんが停泊し、そして行き交い、その数は数百数千とも言われている。海面より高い地へと船を運ぶ閘門こうもんが幾つもあり、豪商貴族の城へと直接に船舶せんぱくが向かう姿も珍しくなかった。“華やかなるスタンブレ”にも劣らぬ繁華ぶりで、南の海カップラスを越えてきた多種多様な人々がいる。香辛料や金銀はスタンブレよりも多く集まり、どこよりも安価に手に入れることができるという。

広い敷地を持つミオの生家にも、例外なく閘門があり、一日に少なくとも五隻以上が出入りするという貴族顔負けの豪商であった。

そんな良家の子息ミオは、商いの能力 「時を読む力」と言われるが、素人には理解し難い はまずまずだったが、その性格が災いしてミール学園へと押し込まれることになった。商人たちは神をも恐れぬが、魔法にはいたく忌嫌の念がある。ミオの父親の行動には、一丁前に度胸をつけて来い、そういう意味合いがあるらしい。

当初こそ、なにもできずにすくみあがっているだけの少年であったが、スメラに出会ってからはなんとか立ち直り、少しずつ魔法に関心を持ち始め、やがて魔法機器開発エンテイアタという分野を設立することになる。開発されたもので実用化に至ったものは、いまだ一例もないが。

しかし、新たな分野を拓ひらいただけでもミール学園に名を残す、偉業を成し遂げた学徒として語り継がれることである。“アンタリエの銀鯨”の名に恥じぬ成果なのだが、いまひとつミオには自信がつかないようだった。

「自信を持ってもいいんだ、ミオ。“銀鯨”は白く波立つ海原の道

を指し示している。船舶の航跡、道を創ったと言つ意味だよ。ミオは“アンタリエの銀鯨”の名を誇るべきだ」

ユウヒを真ん中に、右側にいるスメラが口角を上げて頭を傾けた。どこか悪童めいた仕草と表情ではあるが、青年を見たミオは恥ずかしそうに、だが嬉しそうに頷く。

「レイネにしてもミオにしても、……既成事実？　つてヤツがあつて、通り名を名乗ってるんだな」

二人の間に立ち、スメラとミオの顔を交互に見ていたユウヒは、腕を組んで唸り始めた。

「俺は、どうなんだろうな、スメラ」

やや意表を突いた“魔獣”の質問に、銀髪の青年は驚いてすぐには言葉が出なかった。ミオも同じのようで、大きな瞳を何度も瞬かせている。

ユウヒの通り名は、いわば連綿と受け継がれてきた老舗の謳い文句のようなものである。彼自身、その名を誇るのになんの不足もないのだが、言われてみればユウヒがなにかを成し遂げたわけではない。

本来は狩人であり、“トローンの暴君”“赤い獣王”を仕留めた時点で“トローンの魔獣”を名乗れるが、あくまで内輪のことだった。

まして、ユウヒは幹部候補生である。

最盛期を迎えようとする国ドラランチスカ王国に、尚武の国アヴェール帝国や、砂漠の国ビウロン王国、そして神聖キーツシリク帝国に響くような武人の名であるかと言われれば、疑問を抱かざるを得ない。

ミームル学園内での素行、あるいは『草原の議場』でのゴブリンを一人で掃いた武勇。なにを持ち出して彼を納得させようかと、ミオは引っ込み思案ゆえの優しさで言葉を紡ごうとしている。もごもごと、やはり引っ込み思案ゆえに声が出ずに不発に終わっていたが。

隣に立つスメラは啞然とした顔を、ミオに見せた悪童のような笑みへと少しずつ変えていた。

「意表をついた」というのは、スメラに限った話では、「なにを言ってるんだ？」と言う意味になり、ミオとは違った反応で返されることになる。

「勇名、武名というものは、あるいは先立つものだったりする。能力の発展や実力の開花、そんなものは後からついてくることもあるんだ。……少し意味は違うけど、虎の威を借る狐ってね」

小声での会話は、よりユウヒの理解を妨げることになった。

よって、続けた彼の言葉は、

「狐から虎になりやあいい、そういう事か？」

「ぶふっ……、……まあ、そんな感じだ」

「間違っではないかと思えますけど、正しくもないんじゃないか……？」
「……っんん！」

ユキアの存在を忘れていた男三人は、レイネの咳払いに半ば慌てて姿勢を正した。ミオは純粹に、ユウヒは師を怒らせないために。“黒猫”に萎縮する二人は、ある意味で名前負けしているのかもしれない。

……スメラは、これといった変化もなく、悠然と前を向いている。

彼の態度にレイネは首を傾げた。「飄々とした」というよりも、もはや傲岸不遜である。

「スメラ先輩……」

「ユウヒ、ミオ、そしてレイネ。唐突ではありますが、登城を命じます。ツブラ・ファンより許可は頂いてありますから、すぐにでも支度を整えてください」

先ほどとはうって変わったユキアの、淡々とした言葉が部屋に響いた。

スメラに苦言を放とうとしていたレイネは、そのことを忘れて呆けた顔になり、ぎこちなく公妹殿下を振り返る。

「……殿下、いま、なんと？」

「登城を命じます。ツブラ・ファンより許可は頂きました」

なぜ、許した？ まずレイネの胸中に浮かんだ言葉はそれだった。ツブラ・ファンはユウヒの派兵を認めないと、語気も荒く話していた。学園長の性質は頑固の一言に尽き、口にしたことを翻したことは一度もない。これと決めたら、どんな状況だろうと、だれが相手だろうと自らの意志を貫く人間だった。

それに、なぜ自分やミオまでが登城を命じられたのか……。

そこまで考えて、レイネはふと気付いた。

中庭でのツブラ・ファンの言葉、あれはだれに向けてのものだったのだろうか、と。

「スメラ先輩……」

再び呼びかけたレイネの声に、疑問ではなく確信めいたものが含まれつつあった。ツブラ・ファンへの言動、公妹殿下を前にしての

態度。彼女の中で合点し始めている。

レイネがなにかに思い至った風なのは、端から見ても明らかだった。見つめるユキアやミオに変化はない。

「一を聞いて、十を知る才媛。……見事な推察です」

「黙ってて、ごめん、レイネさん」

この二人の反応で、スメラと呼ばれる青年が何者なのかを、完全にレイネは把握した。把握したものの、あまりの荒唐無稽さに、呆気にとられて礼を尽くすことを忘れてしまっていた。

「あ？ なに、なんだ？」

ただ一人、その場の雰囲気についていけない者がいる。

“魔獣”は、驚き固まる師匠を窺いながら、周囲の人間へと視線で訴えかけた。が、ユキアもミオも苦笑を見せるだけでなにも答えない。

あまりすることのない真摯な顔つきをゆるめたスメラは、捉えどころのない笑みを浮かべ、不思議そうにしているユウヒの肩を叩いて答えた。

「ドラランチスカの狐狼”ラオニーとは、俺のことさ、ユウヒ」

「スメラは“白痴の狐狼”だろ、通り名でも盗作はダメだと思っぞ。それに、国王陛下の通り名を盗むなんて」

……直接的に言っても理解しない“魔獣”が、スメラが何者であるかを知ったのは、丸一日が経過した後だという。

第三話「魔都の狐、魔窟の狼」後編に続く

第三話 「魔都の狐、魔窟の狼」 前編（後書き）

世情とか人間関係とか、自分はこだわり過ぎるようです。でも、そろそろ開戦させたいと思います。では。

第三話 「魔都の狐、魔窟の狼」 後編（前書き）

遅れた……おおいに遅れた。すみません……。

過去、神聖キーツシリク帝国は、ドラランチスカ高原王国に対して二度の大規模な軍事行動を起こしている。ドラランチスカとペイルバネスを滅ぼした、「第一次討魔神軍」ルコンキシュータが、一度目のそれである。その後、ドラランチスカは半年ほどでキーツシリクの支配を跳ね除けて再び興国したが、ペイルバネスは神聖帝国の支配下のままであった。それから八年が経過し、「第二次討魔神軍」ルコンキシュータが開始される。兵力差は、前大戦の「メラスナー平原の殲滅戦」せんめつ後に似た様相で、キーツシリク十万対ドラランチスカ五万だった。

だがこの戦いは前大戦と違い、終始ドラランチスカ優勢のまま最終する。

トローン山脈以南のドラランチスカ貴族や騎士たちが無傷のまま敗残兵となってしまうことが、要因の一つである。「第一次討魔神軍」ルコンキシュータの時下、キーツシリクの急襲に混乱し、交錯した情報は信憑性に乏しく、南方の諸将は為す術もなくただ自領を守るしかない状況だったのだ。

前大戦に参戦できなかった南方の騎士たちは戦意を高揚させて出陣、弱兵と誇られるドラランチスカだが、その士気の高さには、尚武の国アヴェールさえも驚嘆したかもしれない。

理由はもう一つある。そして、それが「第二次討魔神軍」ルコンキシュータ勃発の原因でもあった。

第一次大戦の大義名分は「魔に仕える者どもを討ち果たし、神の威光を示す」だった。どんな思惑があつてそんな大義名分が生まれたのか、ドラランチスカ人には一向に理解できないことである。現在

でも分かっていない。

しかし、第二次大戦のそれは、ドラランチス力人にも経過や思惑を知ることができた。

「異郷の地に魅入られ縛られた、哀れにして敬虔な信徒たちに、真の愛を。神の御前に導き、立ち返らせん」

つまりは、裏切ったキーツシリク帝国軍を討伐するという意向である。

「第一次討魔神軍」の際に反旗を翻した帝国軍は、当然ながら故郷に帰ることができない。そこで彼らはキーツシリク敗戦の混乱に紛れて特使団を派遣、自分たちの家族や親族をドラランチス力に呼び寄せた。そして半数近くが成功を収めている。

また、“スタンブレ事件”を境に、キーツシリクを見放すキーツシリク人が増えていた。農民、商人、果ては聖職者その人まで。身分階級を問わず亡命の人波は続いた。「神懸りの国」と元キーツシリク人に言わしめた国が、およそどのような状況であるのか余人にも容易く想像できる。「神懸りの国」と完全に決別するには、ちょうど良い時期だったのだらう。

ドラランチス力側は、しかしながら彼らを拒絶する理由などない。キーツシリク教会軍と違い、敵対していたときの帝国軍は、まっとうな軍略と正々堂々とした軍力でドラランチス力を打ち破ったのだ。しかも、最終的には第一次大戦終結の決定打となった彼らである。確かに怨恨はあるものの、同じ土地で暮らす住人として許容されていた。

煩わしい故郷に別れを告げ、新たな地の人々に迎え入れられた矢先、自分たちのせいでドラランチス力が侵されようとしている。

このことに奮起しない元キーツシリク人はいなかった。ドラランチス力内での役職、地位、身分、そのすべてに関わらない。彼らも起ち上がったのだった。

前大戦に参加できなかった南方のドラランチス力騎士と、安寧を脅かされた元キーツシリク軍人。血気も盛んな新奇しんきのドラランチス力軍が、聖職者が首脳である「討魔神軍」ルコンキシュータなどに遅れをとるわけもない。前回、凄惨せいさんな戦火に巻かれたスタンプレは、キーツシリクの侵攻を想定して半ば要塞化、さらに橋頭堡きょうとうぼとしてドラランチス力軍を支えた。

ドラランチス力歴二一三年、初夏。

スタンプレの西、メラスナー平原で両軍は激突した。

「第二次討魔神軍」ルコンキシュータは夜明けとともに始まった。だがその戦役の名に沿わず、機先を制したのはドラランチス力である。天地人の理ことわりを得た彼らは、朝日を背負い、高揚するままに雄叫びを上げ、メラスナー平原を鷲進ばくしんしていった。

ドラランチス力の騎士は喜々として敵陣に馬を乗り入れて槍を振るい、元キーツシリク人は決意を胸にかつての同郷人を剣で斬り捨てた。土煙と血煙が朝日を鈍く光らせるほどに立ち込めて、叫喚きょうかんがそこかしこで上げられている。剣と槍と戦槌メイヌを、思惑と欲と信念を、メラスナー平原に存在する。または存在していた。人間たちはぶつけ合い、凌ぎ合い、潰し合う。戦闘は苛烈を極め、まだまだ激しさは増すかに見えた。

しかし、たった半日でメラスナー平原の会戦は終息する。十万対五万という兵力差にも関わらず、キーツシリク軍はるくに戦いもせず後退をくり返し、ついにはメラスナー平原から撤退してしまっただった。

勢いに乗ったドラランチス力軍　主にドラランチス力騎士たち

は、三日で進軍路の途上にある数々の砦を落とし、五日目には掃討戦へと移行した。順調と言うよりも、拍子抜けしてしまうほどに弱いキーツシリク教会軍を追い詰め、ついにはキーツシリク東部の要衝フロウディフに王手をかけた。

メラスナー平原より西の原野は、起伏が少なく、だが往々おつめつに突出

した岩山が存在する。濃く緑化した草原にそびえるその上に、城塞フロウディフはあった。言うまでもなく、その姿形を見るだけで攻城戦が長引くであろうことは推して知れた。

加えて、堅固な城塞には“フロウディフの竜騎士”なる高名な将がいる。「第一次討魔神軍」には参戦していなかったが、彼の戦ぶりは遠くまで響くほどの有名であり、キーツシリクには稀な、戦上手な猛者であった。ドラランチスカと相対したことはないが、北方の帝国アヴェールとは何度か矛を交えている。負けはしなかったが勝ちもせず、しかし尚武の国との互角の戦いを繰り広げた彼の名はドラランチスカに広がっていたのだった。

そんな“フロウディフの竜騎士”を前に、ドラランチスカ軍は色めき立つ。これまでのような弱いキーツシリク軍と違い、彼は生粋であり戦上手な軍人、一筋縄ではいかないだらうと気を引き締めてフロウディフ攻城戦へと取り掛かる。

前記したとおり、「第二次討魔神軍」はドラランチスカ優勢のまま、そして意外な結末を迎えることになる。

その結末へと導いたのは、“竜騎士”
名を、ウエルセークと言う。

神聖キーツシリク帝国は「第一次討魔神軍」以後、深刻な分裂状態に陥っている。その兆候はかなり以前から窺っていたが、第一次大戦の予想だにしない敗走が助長させたようであった。

キーツシリクの統治は形骸化、各地方領では有象無象が野心を持つて起ち上がり、形骸さえ打ち砕く勢いで群雄が乱立した。領主公を殺害して家臣が成り上がった地域や、盗賊などの無頼の輩が支配する地域、民衆が暴動を起こして統治者も官僚も排された地域などもはや野人の跳梁跋扈の体である。

そうした背景もあり、いつになく熱狂的で欲望に駆られたドラランチスカは、キーツシリク領土を少しでももぎ取るうと斬り込んでい

く。玉座に就いて間もない若き“ドラランチスカの鳥獣王”^{グリフォン}も、戦勝の勢いによつて支配欲を高めていた。

そんな折り、一人の青年兵士は冷静に状況の推移を見守り、やがて女王陛下に進言する。

「本来、蛇と鷹は相容れぬ敵同士^{かたき}、互いに狙い狙われの間柄。しかしながら相手は“竜騎士”であり、陛下は“鳥獣王”であります。野生に在らぬ理性を持つ者同士、ここは融和を進めることが上策かと」

あるいは諫言とも言えたかもしれない。青年兵士の含んだ皮肉に、“鳥獣王”^{グリフォン}の雷喝と拳が対価として払われた。

“すごすごと歩み去つていく青年兵士の背中を見送り、しかし女王スズカは戦勝の熱を追いやることに成功していた。

少し齒噛みしながらも、彼の言うことが最上であることに気づいた彼女は進軍を停止。城塞フロウディフを囲みながらも投降は呼びかけず、和平を呼びかけた。その際、ドラランチスカ軍のだれもが女王陛下の正気を疑つたらしいが、おおつぴらに声を上げる者もいなかった。

後に記される年代記は「先見の明、千里眼を持つ“鳥獣王”なればこそ」とスズカを讃えている。当時こそ騎士たちに疑惑の目を持たれもしたが、間違つた判断ではなかつたということである。

しかし正しかったのか、と問われれば、当のスズカ本人さえ首を傾げるだろう。

四十四年前に、スズカとウェルセークと、ごく限られた人間しか知らない約束が今、履行されようとしていた。

数えて十七歳、まだ誕生日を迎えていないので十六歳であるユウヒ。どちらにせよ若すぎる狩人は、しかし神童と呼んでも過言ではないほどの膂力しじりよくと体力に恵まれている。

類を見ない逸材いっさいを友とし、臣下としたスメラ 国王ラオニーもまた、“鳥獸王”グリフォンより千里眼を継承した神童と讃えられた。

幼い頃から聡明で、物事の成り立ちや表裏を正しく理解する、読みに長けた子供であった。現在、公妹ユキアが画策かくさくしている兵士の増強は、もともとラオニーが発案したものである。「急激な軍備拡大は、周辺諸国の不安と疑心を掻き立てる」と、穏やかに流れる小川の如く瀟々しょうたうと進めてきていたのだ。

およそ十年ほど前から、ラオニーがわずか九歳の頃からである。

「……必ず、あの子は関わってくる。あのとき、軍備増強の策を聞かされたときから、そう思っていました」

ドランチスカの弱兵ぶりに憤慨ふんがいした、子供ゆえの蒙昧もつまいさから立案されたものではないことをスズカは覺っていた。

弱兵ルコ、と周辺諸国にそしられることは多々あったが、「第二次討魔神軍」ンキシュウタ時下、ドランチスカは快進撃を繰り返したのだ。相手方の激しい弱体化など、さまざまな理由があるものの、易々やすやすと負ける国ではないということが証明されたわけである。現行のままでも軍備は充分だった。

それでも増強を強く推おしたラオニーは、

「近い将来、隣国キーツシリクは完膚なきまでに瓦解します。そのとき、諸国がなだれうつてもぎ取りにかかるでしょう。乗り遅れる

わけにはいきません』

そう言ってスズカや臣下たちを仰天させた。

ラオニーの言は、特別特異とくいであったわけではない。キーツシリクの衰退ぶりを知る者なら、だれでも予想しえたことである。だが、混乱に乗じた奪い合いに参加するとは考えていなかった。

ドラランチスカに住まう者、あるいは状況を知る者ならば、血生臭い争奪戦に乗り出さずとも国力が衰えることはないと信じていたからだ。事実、アヴェールやビウロンなど周辺諸国に比べてやや狭い領土であるが、大陸・海上貿易の交流点であるために他国を凌駕する富国となっている。

衰退したキーツシリクの領土をわずかばかり手にしたところで、さらなる栄華が約束されるわけでもない。神童と呼びつつも、陰ではラオニーを嘲笑する臣下が多かった。または、戦を好む鬼子と忌む者もいた。「第二次討魔神軍ルコンキシュータ」からそれまで、長い年月が過ぎたとは言い難い。しかし、やはり飽和する者が多くなり始める時期であったようだ。

周囲がラオニーを危険視するなかで、スズカや一部の側近たちは理解を示した。ゆえに軍備強化を認可したのだが、周囲が危惧するところとはまた違った点で、スズカはラオニーを危ぶんでいた。

「シナ、あなたの言う通り、ラオニーには独断専行のきらいがあるようですね。ユキアとともに事に当たると考えていましたが……」
「内治に関しましては、陛下は陰ながら殿下に助言などを行い、仲睦まじく手を取り合っているようですが……。こと外征の話となると、陛下は一人ひた走るようですね」

シナの言葉が指す外征の話とは、『草原の議場』での一件であった。ユキアは“トローンの魔獣”をキーツシリク人の前に連れて行き、彼らの敵対感情に火をつけてしまった形になったのである。

そうなることを予期できなかった彼女を責めることはできない。いかんせん、キーツシリク人の倫理観りんりかんはドラランチス力人に理解できるものではなく、そのとき実際にユキアは呆れて物を言えなくなっている。

ともあれ、ユウヒがキーツシリクの感情を逆なでする存在であることを教えず、キーツシリクが感情のままに行動するように仕向けたのが、ラオニーである。「一人ひた走る、独断専行」と言われたのは、その後のユキアがユウヒに無期停学処分を下しているところから明らかであろう。公妹殿下はなにも聞かされていなかったのだ。

「あの子は……、なにを考えているのでしょうか？ もはやもうろくした頭ではなにも予見できません、シナ」

「なにを仰られますやら、“鳥獣王”？ スズ力様がもうろくしたというなら、わたしなど、とうに心の臓が錆びついて土の肥やしになっっているはず」

「……どれだけ私を化け物扱いすれば気が済むのです？」

「“鳥獣王”は神獣、強いて言えば化け物。気が済むも済まないもありませんが……」

「シナあ……？」

再び現れた“鳥獣王”グリフォンの片鱗に、かつての側仕えの老武人はそっぽを向いてはぐらかした。先刻は柄にもなくうろたえていたが、なんとなく始末のつけ方をさとしたらしい。要はスズ力の良識を利用した、ということである。若かりし頃の彼女にもそれがあつたなら、自分の心的外傷トラウマも少なくて済んだだろうに、とどうでもよいことを考えたりもしている。

ふと、その先に人影を認めたシナ。ユウヒがよく知る、人の悪い笑みを浮かべた老武人はスズ力に向き直った。

「なにを考えているのか、説き伏せ、聞き出してみてはいかがです

か

三白眼になっていたスズカは何事もなかったかのように表情を戻し、そちらへと顔を向けて孫を出迎える。温かな笑みを湛えながらもどこか硬くなってしまうのは、歩み来るラオニーの神妙な顔つきを見たからなのかもしれない。

「ラオニー……」

「憩いの時間に失礼します、お祖母さま。……かねてよりの懸案、ついに履行のときを迎え、決着がつきます」

息を飲み、目を閉じたスズカ。神童が動き始めた、これから先はもはや止めることは不可能になる。いや、現時点でも掣肘さえできない。止めるならば、十年前だったのだ。

シナの言う通り、せめて彼の思惑だけでも知ろうと、かつての“グリフォン鳥獣王”は口を開く。

だが、それを見越したかのように銀髪の青年は先んじた。

「シナ、待機任務は解除された。ドラランチスカ第三師団は進軍準備に取り掛かっている。ゴーパーが探している頃だろう、すぐに向かってくれ」

この言葉で、スズカはすべてを把握した。

「……武を以て、竜騎士との約束を果たすつもりですか!? 彼はそんなことを望んでは……!」

「ドラランチスカ年代記に曰く、『竜騎士』は語る、志成らざりし時は、所有するすべてをドラランチスカ王家に差し出す。その契り、血書にて認めん、と。『鳥獣王』は応える、血を以て捺印し、我も血書に従わん。ここに和睦を超えた戦士の契り成るなり、と』……」

慌てふためく祖母を尻目に、銀髪の孫は朗々と年代記の一説を語った。

四十四年前、スズカとウエルセークの交わした約束は、そのまま年代記に収められていた。しばしば年代記は、装飾に過ぎることがままある。ラオニーの語った一説もまたその類であろうと、真実を知らぬ者たちは考え、ことさら目を剥くようなことはなかった。折しも、キーツシリクの支配を跳ね除け、武の女神たる“鳥獸王”^{グリフォン}スズカが台頭していた時代である、無理からぬ過美装飾であろうと考えられていたのだ。

だが、現実はそのまま、真実だった。

「失礼ながら、陛下。この老骨めの愚問をお聞き届けくださいませんか？」

「……申してみよ」

絶句して固まってしまったスズカに代わり、いまだ彼女に側に控えていたシナがラオニーへとにじり寄る。細く長い眉の片方をわずかにはね上げ、ラオニーは老武人に顔を向けた。どこか苦々しい表情であるところを見ると、ややシナが苦手と感じているようだった。

「年代記が示す歴史、それが真だとして、どこに“竜騎士”と戦をせねばならない理由がございましょう？ 彼の者がキーツシリクの統一に失敗したこと、音に鈍くなりつつある我が耳にもしかと聞き届いております。なれば“竜騎士”は失意に沈み行く廃人同然、戦を仕掛けるにも値せぬと思われませんが……」

「……そこの若人よりか膂力があるくせに、言葉はまず皮と肉で出来ているのだな、シナよ」

彼は一つ咳払いすると、以前ツブラ・ファンに見せたような表情

を持って、二人の老人に相對した。やや切れ長の目は温か味を消し、代わりに冷厳さを蓄え始める。

やがて紡がれたした言葉は、やはり断定的で、独裁的なものであった。

「血書を持ち出したところで、彼の者が戦をする気であること、戦に果てようとする事明らかであろう。このこと偽りと申し立てても、貴方がたにとって建前でしかなかろう？ なにせ彼の時代を、敵味方に分かれていたとは言え、共に過ごした仲なのだから」

居住いを正し、ラオニーはスズカに向き直る。

「これよりドラランチスカ第三師団は、キーツシリク東部ボンボラド地方、要衝フロウデイフの攻略に取り掛かります。併呑、合併の報をいち早くお祖母さまにお届けに参ります、何卒、心平らに……」

6

なぜ、そうなるのだ。

レイネは溜め息を吐き、こめかみを押さえた。近頃、めっぼう熱くなるようになった頭を振り、深呼吸を繰り返して放熱を試みる。しかし、一度目ひとたびを開ければ、整然と並び立つ医療部隊が視界に入った。

半ば諦めかけた藍色の少女だが、年下の姫君に何度目かの確認を行った。

「殿下……。なぜわたしが、部隊長を務めなければならないのですか」

「『草原の議場』での勲しゅんと言いましたが？ ……正規の軍隊ですの
で兵站へいたん警護も兼ねますが、そちらは別の者に任せますから、治療に
専念するよう」

「そうではなく……」

論点がずれている、とレイネは言葉を続けようとしたが、やがて
口を閉ざした。ユキアは確かにラオニーの妹だった。論点がずれて
いることなど百も承知で答弁していることが、彼女のうそぶいた表
情から窺える。

彼女は、ユウヒと違ってミーミル学園の卒業は確定していない。
まだ学徒の身分であり、仮に戦場に出ることとなっても、あくまで
ミーミル旗下の学徒兵としてであった。それなのに正規の軍に編入
されたとなると、学園とドランチスカ王家の間に軋轢あつれきが生じる。い
わば、なわばり意識が云々、という話である。

ラオニーにしてもツブラ・ファンにしても絶対的な権力者という
わけではなく、なにかすることに配下たちの、一応の同意が必要に
なる。たいていの場合には二つ返事で政策などが施行されるが、一言
の断わりもないまま独走すれば要らざる不和を呼ぶ。

レイネの件は、ミーミルとドランチスカ、双方と、また双方に、
縦横の亀裂を走らせることだと言えた。これまでも何度か、学園の
運営員と王家の官僚が押し問答しており、その内容は例に漏れず、
組織にありがちな縦割りゆえの言い争いである。あるいは上層部、
下層部からの連絡がないための状況認識不足、果ての水掛け論だっ
た。

ともかく、ユキアのやるうとしていたことは臣下たちにくさい面
をさせることになる。加えて、レイネ自身の人格も疑われることにな
りかねない。抜き身を晒して街を歩けと言われているようなもの

なのだ。

やはり、受けるべきではない。承諾しかけていたレイネだったが、毅然とした表情でユキアと向き合った。

レイネが従軍医を志したのは、ユウヒの存在によるところが大きい。とは言っても、やはり彼女にも、自らの将来や出世には興味がある。要するに野心に似た願望である。

自分の魔法はどれほどのものなのか、持ちえた才はどこまで通用するのか。人の上に立ちたいと切に願っているわけではないが、役に立てるならそれも良い。

軍に入隊し、功を挙げることが出世への近道。それは単に力自慢の猛者どもに限られた話ではなく、レイネのような魔法使いや知略に富んだ学者などにも当てはまることなのである。前者は従軍医や高位軍職者の身边警護、後者は軍師職や幕僚に。軍内で立身するに必要なのは、優れた能力ちからだけなのだから。

だが正規の手順を踏まえずに立身出世しても、賛美以上に非難と妬みを受けることになる。評価されたことは素直にうれしいが、いきなり部隊長では腰も引けた。ドラランチスカよりもミーミルきえに帰依する傾向のあるレイネは、その点からも、ユキアの申し出は断わるべきだと判断したのであった。

「公妹殿下、やはり私には時期尚早……」

「レイネ！ 聞いてくれよっ、俺、ゴーパー隊の副隊長だってさ！」

間の悪さはスメラに感化されたのか。額に手を当てて溜め息を漏らしたレイネは、そんなことを考えた。

相変わらず公妹殿下の御前に立とうと態度を改めない“トローンの魔獣”は、まるで遊びに加えてもらえる子供のように澆刺はつらつとしてフットいる。据え頭巾の赤熊の頭がユウヒの背中で踊り、こちらも熊と言うより犬の顔に見えた。

全身で喜びを表す同じ年代の少年に、しかし少女は厳しく睨みつ

ける。普段から冷徹な彼女のそれは、ユウヒを我に帰らせるには充分すぎる一瞥であった。

「な、なん……。……。あ、公妹殿下」

そういうことか、と表情で語ったユウヒは居住いを正してユキアに頭を下げた。

レイネは逆立てた柳眉を戻し、視線も戻す。機会は逃してしまつたよう、幼い姫君は“魔獣”に身体を向けていた。

「副隊長と言つても、権限はほとんどありませんよ？ それに、古老の兵シナを監査官に任命しました。“トローンの魔獣”の真価が問われる一戦となるでしょう、気を引き締めてください」

「シナ爺さんも来る……。、じゃない、来るんですか。座を奪つたみたいな感じだつたけど、とりあえず良い感じなんですわね」

ほとんどなにも分かつていないに等しいユウヒに、レイネは眩暈めまいを覚え、ユキアは苦笑した。監査官と言えば、万人が良い目で見ることのない役職である。いくら信頼の置ける者がそうだったのだとしても、多少は陰を滲ませるものなのだ。

少女たちの微妙な反応に“魔獣”は首を傾げ、だがすぐに顔を輝かせる。

「ミオも、なんかすごい部隊に配属されたって聞いて、聞きましたけど？」

「“アンタリエの銀鯨”は、兵站部隊の隊長……。通常、簡易の野営施設や進軍路の整備などを手掛ける兵です。こちらは腕力よりも、その……」

財力が物をいう部隊。そう口に出出来ないユキアの心情は推して知

るべし、とにかく、ミオの名家の名がおおいに役立つ部隊であった。ドラランチスカ王家に『白帆の森』アンタリ工屈指の豪商が投資しているという証明になるのだ。多額の遠征費を手にするための演技、パフォーマンスというわけである。

ユキアの言葉と違い、体力が第一の仕事をするのだが、あくまで表立つてのこと。有力な貴族・豪商の子息は、まずこの部隊での隊長、監督をすることがドラランチスカ王家への仕官の あるいは御用商人の 第一歩となる。

ある意味、ユウヒの言う「すごい」は当てこすりともなるが、もちろん彼にその意思はない。

「……お、噂をすれば。ほら、レイネ、ミオが指揮してる。投石器やら丸太やら、いろんな資材が運ばれてく！」

もはやユキアのことなど見えていない様子で、ユウヒは草原を駆けた。

彼の一拳一投足を医療部隊の兵士たちは戸惑いながらも面白おかしく眺めており、レイネは態度を変える必要がないと感じた。なので素直にユウヒの後を追い、丘陵の端に並び立った。少し遅れて、ユキアは二人の間に立つ。

「……これが、戦に向かう戦士たちの……」

「ええ……。あときの陣触れなど見戯しぎです」

「勇壮って言葉は、こういうときに使うんだろうなあ」

この三人は見ていた。『草原の議場』でのドラランチスカ軍の整然とした軍列を。

あときは寡黙さが屈強な軍隊の体を表していた。そこかしこで私語が見られたものの、全体的に黙然とした素朴な力強さが感じられていた。

だが、それはあくまで一例であるらしく、いま眼下に広がるドラ
ンチス力第三師団は、騒がしいほどに高揚し、鬨の声を今か今かと
待ちつけていた。銀の穂波は風によらず絶えず蠢き続けて、血肉を
欲する触手の如き危険な印象を与え続けた。

喧騒もまた、勇猛。どこか危なげな軍隊ではあったが、これほど
頼り甲斐のあるものはない。ユウヒたちはそう思い、顔を見合わせ
る。

「トローンの魔獣」、
「ミーミルの黒猫」。国王陛下を、我が兄
を、よろしく願います」

「……微力ながら」

「ぶん取ってきますよ！」

音高く鳴り響いたレイネの平手とともに、ユキアは進発の号令を
かけて、ドランチス力第三師団は足音も高く歩み始めた。

ドランチス力歴二五七年、初夏のことである。

第四話「背徳の竜騎士」前編に続く

第三話 「魔都の狐、魔窟の狼」 後編（後書き）

ようやく戦の話に突入できそうです。稚拙ながらも頑張ります。
…なるべく早く。
…

執筆断念

「Ambivalent Quaker」の執筆を断念いたしました。

理由はいたって単純、構想を練らずに始めたために、何を書いているのか分からなくなったからです。

正直、愚劣極まりない行為だと自分でも感じています。

詫び文を書かずに「Ambivalent Quaker」を消してしまえば良いとも考えましたが、わずかながらも読んでくれた人たちもいたので、けじめを兼ねて掲載しました。

「Ambivalent Quaker」は消さずにこのまま放置しておくつもりです、自戒の念を込めて。また似たようなものを書くかもしれませんが、その時は「Ambivalent Quaker」と比べてみようかとの思いもあります。

こんな事を言うのもおこがましいのですが、「挫折した人間の書いた小説」という点から、なにか学んでいく人もいるのではないかとも思っています。……まずは自分だろう、と痛い指摘がすでに身の内にあるので、ご指摘はご容赦ください。

改めて構想を練ることの大切さを感じ、次回はこんなことがないように書き続けていきたいです。できれば、多くの人に読んでいただけ、多くのご指摘ご指南をいただけるような。いま現状の体たらくでは望むべくもないことありますけれど。

なるべく早く執筆開始します。似たようなものを書くか、まったく違うものを書くか、それさえも決まっていませんが、すくなくとも行き当たりばったりで執筆しないようにします。

次は、心機一転、ちっぽけな物書きのプライドを以て望みます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3502f/>

Ambivalent Quaker 執筆断念

2010年10月9日01時48分発行